

月刊 中東レポート

第 11 号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03) 291-5533
編集 J. R. A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費20000円

レーガンの対「テロ」キャンペーン発動

一九八六年四月一〇日

一、レーガンの「法的根拠」

先月、米帝の対リビア軍事恫喝が強まっていることに注目したが、三月二四日、とうとう、米帝はリビアを爆撃した(資料①)。

口実は、「シドラ湾は公海であり、米国は公海航行の自由、公海での演習自由の権利を有する。しかるに、リビアが攻撃をしかけたので、正当防衛のために攻撃した」というものである。これは、奇妙な論理である。なぜなら、

イ リビアは、七三年に一二カイリ

を領海とするも、八一年には国連海洋国際会議での一二カイリ領海決定(八二年)以前から、シドラ湾を死活領域として宣言している。

八一年八月、リビア領海に侵入してきた米軍機に対し、リビア機は迎撃に出て、二機撃墜されている。米帝は、たとえば、ニカラグアに對して「我が死活領域たる中米で、共産主義を輸出している。反政府ゲリラに援助を送っている」と言

いばかりをつげなかっただろうか？

ニカラグアのコリント港を機雷封鎖をしなかったらどうか？

あの時、一二カイリ外に機雷施設をしたのだったろうか？ 主権国家に對して封鎖するということが合法的か否かを問うべきなのだが。

米帝以外の国は「死活領域」を持ったり、同盟者、友人を支援したりしてはいけないということかも知れないが。

ロ 件の「一二カイリ領海」を、米

目次

レーガンの対「テロ」キャンペーン発動	1
米帝のリビア・ジャマヒリヤ侵略を弾劾する(資料①)	7
「土地の日」十周年記念集会でリビア攻撃非難	7
米帝のリビア攻撃	8
米国紙の評論分析(資料②)	9
アザニア人民慰撫戦術(資料③)	10
エジプト経済と農地法改悪攻勢(資料④)	10
エジプトCSF(中東治安軍)の叛乱について「大衆的支持または軍も支持していた」ということは絶対ないですな	11
「テロリスト連邦」国家の反論(資料⑤)	14
対テロ勧告案と対テロ法案(資料⑥)	14
「パチカン・イニシアチブ」支持(資料⑦)	15
レバノン南部レジスタンスは証言する(資料⑧)	15
アマル運動第六回大会(資料⑨)	16
「土地の日」十周年にあたり「土地の日」十周年声明	16
「土地の日」十周年記念連帯あいさつ	18
激動の中東ドキュメント 1986年3月8日～4月10日	19

帝は自らに適用しているのだろうか？ していない。同条約は、公海(一二カイリ外)の海底資源発掘、利用、統制の共同をも定めたものでもある。米帝は、これを拒否したのであった。自らが調印、批准していない条約を盾にとり、「公海航行自由」をふりかざすの

だろうか？ 日帝の一〇〇〇カイ
リのシーレーン防衛は、「公海航
行自由」と、きつと関連している。

さて、レーガンの論理に公に同
調しているのは、やはり、サッチャ
ーとベレスであった。なるほど、八
二年の戦友である。片や、アルゼン
チンの主権に対し、あくまでマルビ
ナス諸島を「領土」と主張し、戦争
をしかけた帝国主義者。片や、「P
LOの息の根を止めるため」に、レ
バノンに侵略し、未だに南部占領を
続けるイスラエルならばこそその話だ。
両者の関係で言えば、パレスチナの
元植民宗主国、現植民宗主国（と言
うより、パレスチナを強奪）という
ものでしかないとしても、レーガン
のもっともらしい「法的根拠」なる
ものを、米国紙でどう評しているか
は、巻末資料②を参照されたい。

二 なぜ今、リビア攻撃なのか？

世界レベルでの反帝闘争の高まり
である。

まず、米帝の裏庭、中米情勢。ニ
カラグア人民は、選挙も行い、サン
ディニスタ政権を支持した。あくま
で、自決を選び、民主主義建設の道
を捨てない。そればかりか、エルサ

ルバドル、グアテマラの反政府ゲリ
ラ戦のしぶとさ。エルサルバドルで
は、米帝は一日一〇〇万ドルを政府
軍に投入しているという。また、南
米の軍事政権時代の終焉と、ブルジ
ョア民主主義のスタート。まだまだ、
人民の民主主義とは言えないまでも
新しい実験ではある。反米感情は根
強い。なぜなら、軍事独裁政権を支
えてきたのは、米帝だから。どうみ
ても、米帝は、自らの裏庭で押され
ている。とくに、原油価格の値下げ、
ドル高により、中進国への脱皮を展
望してきた産油国（メキシコ、ベネ
ズエラ、エクアドルなど）、歴史的
な親米国家が、対外負債にあえいで
いる。

次に、二一世紀を担うとされたア
ジア太平洋地域。二月のフィリピン
人民の勝利、そして現在胎動中の韓
国民主化運動の高揚。ここでも反米
感情は高いし、自決、民主主義を要
求する大きなうねりがある。そして、
アフガニスタンでは、政府軍が攻勢
に出ており、パキスタンには、ブッ
ト女史が帰国した。

いのが法則だ。そして、人間は、よ
り良い社会建設にむけ、歴史を前進
させてきた。南アのアパルトヘイト
国家は、屋台骨がぐらついてきてい
る。アフリカ人に対して、一定の譲
歩をせねば、もはややっていけない
段階に達していると言えよう。アフ
リカ人が、労働者として、自らを解
放することなく社会全体を解放でき
ない存在として、闘いを前進させて
いる。南アは、言うまでもなく、帝
国主義にとつては、二一世紀へむけ
た戦略資源国である。加えて、歴史
的にも、反共防波堤として、イスラ
エルとの政治・軍事・経済関係も深
い。かつてのローデシアがジンバブ
エとしてアフリカ人・入植者の国と
ならざるを得なかったごとく、南ア
も、やがては、政治権力の分有形態
をとらざるを得ないだろう。もはや
肌の色では説明できない社会の不正
義、生活の不安定、これがやはり二
一世紀へむけた再編を要求している。
今まで南アが表立って展開してきた
反革命攻撃（たとえば、隣国への侵
略、アングラ反革命軍への支援・援
助）を、米帝が肩代りしようとして
いる。レーガンが破廉恥にも、反革
命軍のサヴィンバをホワイトハウス
に呼び、ステインガーミサイル等の

援助を約束したこと、端的に表現
されるだろう。また、イスラエルが、
せせとアフリカ諸国に外交攻勢を
かけ、イスラエルの政治合法性再確
立キャンペーンを行っているのも、
その一環だろう（七三年の一〇月
戦争後、イスラエルと断交しなかつ
たのは三カ国のみであった。現在、
三カ国が復交している）。さらに、皮
肉にも、パレスチナ人民の「土地の
日」に、アザニア人民諸潮流リーダ
ー、幹部（と、言われるが）二〇名
を、初めてヒスタドルト施設での
「訓練」一カ月コースに連れこんだ。
ツツ師など、民主的リーダーたちの
反対を押しきって（資料③参照）。
そして、アングラでは、政府軍が春
季攻勢にうって出るものと期待され
ている。これも、対リビア包囲網の
要である。リビアの支援、または社
会主義国の支援を受けようと受けま
いと、アフリカ人民の解放の闘いは、
当面、飢餓後進性との闘いとして、
世界人民の支持を受けて、発展して
いくだろう。

そして、焦点たる中東。イスラエ
ルに対する戦略バランス構築を主張
し、地道にイスラエルとの対峙を崩
さないシリアは、米帝、イスラエル
にとって脅威である。シリアへの恫

喝も含めて、今回は、やはりリビア
でなくてはならなかったのだろうか？
次のように、その根拠をひろう
ことができれば。

イ キャンプ・デービッド路線の行
き詰まり打開

もう一度、キャンプ・デービッ
ドの役割を捉え返してみよう。必要が
ある。つまり、ベトナムでの敗
退、イラン革命の前夜に、米帝は、
中東戦略を転換させたのである。
一言でば、アラブ・イスラエル紛
争をアラブ・イスラエル統合支配
へと変える。経済的にも、二一世紀
のハイテク時代へむけ、再編を
めざしている。

エジプト、イスラエル両国とも、
二一世紀、帝国主義の一員として
生きのびるために、この再編をや
りぬこうとしている。両国とも、
構造不況から、今までは違う支
配形態、産業構造を作らねば、国
内不安を統合していく力が弱体化
する一方なのだ。

ロ エジプト国内危機

ナセルが、不十分ではあっても、
社会主義的国民経済建設をめざし
てきたのに対し、伝統的支配階級
たる地主、商工業資本家の利益を
代表したサダトは、エジプトをキ

ャンプ・デービッドにより資本主
義の道へと、ひきもどした。それ
から、約一〇年後の今、地主階級
は、五〇年代の土地改革法改悪を
要求している（資料④参照）。資
本家階級は、農業切りすて、工業
化促進、エジプト版国土「改造」、
外資導入により、エジプト資本主
義の延命を企てている。キャン
プ・デービッドにより、米帝から年
間二〇億ドル以上の援助が得られ
るようになったが、人民は、生活
を圧迫され、地域共同体の良好側
面が資本主義的生産関係により破
壊されている。民族の記憶として
も、イスラエルとの和平は、アラ
ブの面汚しというものがある。だ
からこそ、CSF（治安維持軍）
の叛乱にみられるごとく、ことあ
らば即爆発する状態にある。

イスラエルの危機と再編
戦後、米帝は、欧帝に対しては
マーシャルプランにより、日帝に
対してはMST援助により、復活
のてこ入れを行ってきた。イスラ
エルに対しては、どうだったかを
みてみよう。

日帝が朝鮮特需で復活していっ
た時代、イスラエルは、経済・技
術援助、関税特権を受けてきた。

日帝がベトナム特需で再生してい
った頃は、とくに六七年戦争以降
は、高度経済成長の時代と言える。
シナイ、ガザ、西岸占領により、
市場、奴隷労働力、土地を手に入
れた。加えて、欧米帝の投資がは
やった。イスラエルは、輸出振興
政策をとり、輸出の伸び率四〇％
を記録したという。米帝は、米企
業のイスラエル投資を促進し、二
三件もの工業開発計画を決定（そ
の九〇％が輸出むけ）。そのうち
の多くが、軍需関連であったらう。
七五年、ベトナムから米帝が敗
退した頃、米帝は、イスラエルと
の間の経済合意に調印した。イス
ラエルを中東一の軍事大国とする
ばかりでなく、工業国として目的
的に育成していくとしたのだ。

この少し前の時期、一〇年後には、
石油およびエネルギー自給をめざ
すよう、米帝はイスラエルに要求。
キャンプ・デービッドは、経済的
には、これを意味していた。七九
年のイラン革命勝利後、言うまで
もなく、中東一の対米貿易国は、
イスラエルであったし、ECも、
メンバーに近い待遇を与えていた。
八三年の戦略合意、八五年の自
由貿易地帯協定、SDI参加へと

煮つまっていくのだが、これはレ
バノン侵略の大損害から生じた軌
道修正であつたらう。PLOの物
質力を破壊し、レバノンの土地と
水を略奪せんとする企ては、レバ
ノン・シリア・パレスチナのした
たかな抵抗に合い、七〇億ドルと
も言われる損害。インフレ四〇〇
％、厭戦気分など、大敗北を喫し
たのだ。親米国家レバノンを作
るところか、「平和」すらレバノン
と結ばず、新市場、労働力、水資
源のほとんどが水泡に帰した。

この危機を乗り越えるべく、イス
ラエルと米帝は、対イスラエル版
マーシャルプランとも言うべき
ものを作ろうとしている。今回、
ベレスが訪米時、米帝と交渉した
のは、この件である。イスラエル
が中東一の軍事大国、そしてハイ
テク工業国として君臨すること、
政治的には反共での域内平和を押
しつけること、これが米帝・イス
ラエルの戦略合意の現在の内容で
あろう。国内が分解しつつあるイ
スラエルは、対アラブ戦（具体的
には、対シリア戦の姿をとるだろ
う）では対峙を保ちつつ、二一世紀
への延命というテーマで統合せ
んとしている。

ニ リビアの脅威

リビアは、地理的には、エジプト、スーダン、チャド、チュニジア、アルジェリアに隣接している。かつて、米帝は、中東一、否、世界一の通信基地をリビアに置いていた。六〇年代、アルジェリア独立闘争の嵐の中、リビアも民族解放運動の戦列に立った。

カダフィ大佐の革命政権樹立後は、試行錯誤しつつ、自力更生経済、人民直接参加の政治形態を建設している過程にある。カダフィ大佐は、これを「第三の道」と呼び、反帝の立場を強く打ち出す一方、各国社会主義建設の教訓を止揚する思想として、宣伝している。彼が反共から容共に変化したのは、「第三の道」をつかんだからである。

彼の思想の特徴は、人民が自然の一部として存在しつつ、自らの社会・経済を自ら建設していくというものである。彼はブルジョア議会、間接民主主義を否定する。これだけで、すでに反帝である。彼は、人民が参加すること、人民が直接自らを統治することによって、それまでの非民主主義的な枠を、社会として越えることが可能

であると主張する。言わば、コミューンの思想とでも呼ぶる。

「第三の道」を保障する経済はどうか？ 彼は、生産者が生産物から疎外されている現状を不自然であるとみる。人民権力樹立後の生産力の発展に伴い、多くの差異を消滅させていくことができる。なぜなら、生産活動が、社会と自己の生存のために行われるからである。彼によれば、「必要の充足、搾取の廃棄、独裁の根絶、社会の富の公正な分配方法の発見により、人類がめざしてきた完全な自由と幸福を最終的に達成する段階の実験」「人間が解放されるためには、必要を解放しなければならぬ」のだ。

レーガンがリビアを許せないのは、この思想であり、リビアが有する物質的・精神的な力量をもって、反帝勢力の支援、反キャンプ・デビッドの闘い支持、エジプト政府への敵対、離エジプト路線の現スーダン政権支援をリビアが進めていることが、脅威なのである。中東の一元支配をめざすレーガニーイスラエルに対し、正面切っ

て闘うシリア、パレスチナ、レバノン人民に援助しているという理由で、リビアを攻撃せねばならない必然性が、ここにあるのだ。

ホ 中東の反帝国家

中東において、反帝反米戦線前線国は、シリア、リビア、イランの三カ国だ。この三カ国は、反帝勢力として協力しあっているだけでなく、アラブ世界のさまざまな反帝反米イスラエルの闘いを支援する物質的・政治的基盤となってきた。反帝の一点での結束は固い。かつて、八二年、レバノンがイスラエルに侵略、占領される前は、PLOは反帝諸勢力の結節環の役割を果たしてきた。八二年を境に、進歩的、民族国家が、米帝、イスラエルとの直接対峙を担っている。シリアは、その対峙・孤立状況を、レバノンにおける進歩勢力支援と、レバノン内戦停戦努力において、反帝の主導権を確固たるものにしてきた。イランは、イラクから強いられた戦争を受けて立ち、継戦の軍事的・経済的困難を乗り越えつつ、周辺国との政治的関係回復により、安定を作りつつある。ここでも、シャー打倒、反米革命勝利後の国民経済建設におき、分解

が生じていると言われる。だが、イランの主張するのは、「義」である。資本主義を根本的に否定するイスラムの価値観が、帝国主義と対峙しているのだ。

「第三の道」をさまざまな実験的試行によって政治的・軍事的・経済的な面から進むリビアは、政治的には「強硬派」である。その分、狙われ易いのだ。米帝は、自らの軍隊をもって、リビアを攻撃した。あわよくば、カダフィ政権の打倒をもって、アラブ世界、地中海、アフリカにおける反帝・反米潮流・離米潮流のみせしめにせんとくろんだのだ。

最終的には、軍事力による米帝支配権の再確立をめざすレーガン政権は、二〇対一で劣勢とも評されるリビアに対して、叩きつぶすまで、あれこれの口実を作っては、しつこく軍事攻撃をしかけるであろう。「力の誇示」とは、軍事力によって、自国の利益実現を計るファシズムの論理だ。リビア人民とアラブの進歩勢力が、反帝・反米で団結する限り、「力の誇示」は、自らの墓穴を掘ることにしかならないだろう。

三 レーガンの帝国主義国家テロ発動

次に、軍事面から、レーガンの「力の誇示」政策をみてみよう。我々革命派は、今回のリビア攻撃を決して許さない。同時に、敵米帝国主義が「対テロ」キャンペーンに軍隊を出した点を見逃してはならない。リビアがテロリストを支援しているというのがレーガンの「主張」だが、ローマ・ウィーン攻撃を口実にしている。が、その前から次のような準備が行政・法政レベルで進んできたようだ。

八四年

四月 第一三八大統領指令発令

二六の米軍事、諜報機関に対し、「テロ」組織への「予防」攻撃指令

夏 レーガン、進歩的、民族的諸国を名指してテロ国家呼ばわり。数カ国がこれに反論（資料⑤参照）

八五年

一月七日 レーガン、ローマ・ウィーン空港闘争に關し、リビア制裁を発表（中東レポート9号参照）

秋 第六艦隊機、ネゲブ砂漠のイスラエル基地で、こっそりと

八六年

命中爆撃訓練

一月下旬 イスラエルで、民間レベルの「国家テロリズム」と世界体制」会議。一〇カ国を国家テロリズムと規定し、対策検討。主催は、米の反共組織。NATO前総長ランスも出席

二月 テロリスト裁判法、米上院通過

三月六日 対テロ審議会が、勧告案をレーガンに提出（資料⑥）

三月一三日 米上院海外活動歳出小委員会で、「テロリスト容

疑者を拉致し、米国法で裁くために、"穏健な力"行使を支持する」とシュルツが証言

三月一八日 米下院、「対テロ法案」可決

この一連の動きから、レーガンが、今や反共か否かをメルクマールに、主権国家、人民に対して、「対テロ予防」攻撃をしかける準備を進めていたことがわかる。そして、リビアが狙いうちされた。今後、この種の軍事攻撃、侵略は、ますます強化されていくだろう。

五月の東京サミットにむけ、レーガンは、政治・軍事・経済的リーダー

として、「西側」の対テロキャンペーン強化、連携を要求してくるだろう。具体共同は、地下で進行しているに違いない。今までCIAが、言わば陰でやってきた反革命謀略を、米軍が堂々とやるようになったのだ。各国帝国主義の側も、レーガンに右へならえとなるだろう。なぜなら、奴らも、二一世紀延命のために、産業・経済・社会再編を強行している過程にあり、全ての不満を反テロキャンペーンでからめとることが必要だからだ。

四 レバノン情勢の特徴

一言で言って、三者合意への反対案として出された「バチカン・イニシアチブ」である。これは、レバノ

ン内戦の「国際化」を狙ったものである。味方の側が、半封建的宗派政治体制から近代的国家建設を展望する勢力として、民主化要求の最低線を三者合意に煮つめてきたが、敵の側は、「カントン制」を持ち出してきた。バチカンをかついで、何とかシリアにも「マロン派カントン」を認めさせようとしている。シリアとの仲介、レバノン各派打診を試みているわけだ。つまり、「国際化」とは、シリアとの交渉を断たれている

ジェマイエルとの「窮余の策」である。と同時に、三者合意による和平（戦争終結）を否定し、シリアの反帝イニシアチブを否定することにおいて、米帝のリビア攻撃と呼応している。ジェマイエルの政治顧問ガッサン・テュエニによると、「中東の国境は、第一次大戦後の和平会議で、大回も、大回間国際会議で、国境問題解決を計るのが妥当。現在、国際会議開催の可能性が有る間にやること。それでなくとも疲弊しているレバノンが、中途半端な解決方式で、これ以上国力を失ってから国際会議をやるうとしても、元も子もない」とのことだ。

フアラシジ党閣僚ハシムの言によると「過去、シリアの安全は、レバノンの安全にかかっているとされたが、現在は、シリア一国ではなく、もっと多くの国が関連するようになってきた。仏、ソ連、米も、自国民がレバノンで誘拐されている。また、エジプト治安軍の叛乱、フセイン・アラファト共同停止、米のリビア攻撃など、中東の各紛争も、レバノンの情勢に影響を与える。現在、"世界的な摩擦"が、中東紛争に火をつけており、一触即発である。政治交渉の

動きとしては、バチカン・イニシアチブも生まれている。政治交渉に失敗すれば、最後の決戦しかない。ファランジ党首カラムも同主旨の発言を行っている。民族派、進歩勢力が、東ベイルート、ジェマイエル本拠地クフィエへの砲撃戦で、軍事圧力をかけてくるのに対し、これを非難。そして、レバニーズ・フロントの政治顧問のマリクも、バチカン、米帝、欧帝を後援に交渉の立場を強めんとし、同様の発言を行っている。さらに、バチカン・イニシアチブをレバノンに限定せず、イスラエル・バチカン国交樹立により、イスラエルをもまきこむ（直接交渉ということになるのだが）ことを提案している（資料⑦参照）。

レバノンとの関連で見ても、マロン派極端機軸は、反動の精神的支柱、時には黒幕だとすら指摘されている。このマロン派経由で、今、バチカンがどういう展開をしているのか、みてみよう。南部のジャジーン、東ベイルートへの常駐特使配置である。ジャジーンがSLAイスラエルに掩護射撃を受けつつ、サイドと敵対しているのに、東ベイルートからイスラム教徒は追い出されたのに、どうみても、民族派、イスラム勢力に敵対している。シーア派、ドルーズが、バチカンの動き、意図に対して不信の眼をむけるのも、歴史的・情勢的根拠がある。とくに、南部のシーア派、スンニ派は、共同して、二四時間の対イスラエルSLAレジスタンスを展開しているというのに、「国際化」という名目でジャジーンにクリスチャン特別区なり、カントナリを作らせるわけにはいくまい。こうした解放の意志を表現し、四月八日、一年前のサナ烈士の闘争から二〇回めの決死闘争がSLAに対してかけられた。正義性のある闘いは、決して、人民が忘れるものではない（資料⑧参照）。

西ベイルートでは、「国際化」に出た敵に対し、八派共闘の治安維持部隊を建設し、レバノン警察との協力下、自力で、自らの地区の秩序を建設していく闘いが続いている。ジェマイエルに軍事圧力をかけつつ、味方内の矛盾を止揚していくこうとして、この（アマルの第六回大会については、資料⑨を参照されたい）。パレスチナ勢力は、米帝のレバニア侵略に対して、大半が一斉に米非難を強め、反米闘争を呼びかけた。レバニアに対して、反帝・反米の立場から防衛していくことでは、一致しているのである。

反面、アラファト派は、レバノンに拠点再建を迫られ、アブ・イヤーダが「かつてのPLOの基盤を再建した」とキャンペーンを行うまでになっている。味方地区内に、単一の政治権力、秩序を建設するということよりも、「かつてのPLO」を建設しようとするれば、当然レバノン主体との矛盾を拡大することになる。しかも、昨年のキャンプ戦争の再燃となりうるし、敵の思いつくばである。あくまでも、レバノン人民の主権・主体を立てつつ、共闘する、という方向が模索されねばなるまい。南部では、こうした共闘が一定進行しているようだ。

陣営総体の強化・発展を保障している。米帝のレバニア攻撃は、その意図からしても、今後も継続しよう。そして、それが、個別レバニアへの攻撃に止まらず、シリア、イランなどの反帝勢力、各国の革命潮流への攻撃、内部撓乱策動として、また、被占領地（パレスチナ、レバノン、ゴラン）での「鉄拳政策」として、ますます強化されていくだろう。敵の側のファシズム攻撃に対し、人民レベルの結束と、指導勢力の結束を土台とする反撃が、今、問われている。

編集後記

三月二五日は、ベカールで大もてだった。米帝がレバニア攻撃に出た数時間後、東京の米大使館攻撃があったから（この点を、イスラエル放送は、強調していた）。ともかく、「よくやってくれた」「ありがと」「流石！」逢う人ごとに言われる。地理的には随分遠い日本とアラブがこんなに近く感じられるのは、やはり闘争によってしかないのだ。久々に溜飲を下げた次第。四月号作りは、レバニア攻撃のため、緊張した条件下で進めたが、力が入る。

資料①
米帝のレバニア・ジャマヒリヤ侵略を弾劾する

日本赤軍

一九八六年三月二四日

米帝は、ローマ・ウィーンのイスラエル・エル・アル航空カウター攻撃について、レバニアが黒幕だと非難した。これは、でっち上げである。米帝は、この言いがかりをもって、空母数隻を含む第六艦隊部隊をレバニア領海に侵略させた。米帝は、軍事挑発と恫喝を続けてきた。

三月二四日、レバニア・ジャマヒリヤ人民は、米帝の侵略行為に対し、ミサイルを放ち、米戦闘機三機を撃墜した。これへの報復として、米帝は、レバニアのリーダー施設、哨戒艇を攻撃。どう言いくるめようと、正当性のかけらもない行動でしかない。対「テロ」を口実に、米帝は、世界の革命的人民の闘いを支援する革命的・進歩的政府への直接軍事攻撃をもって、自らの権益擁護、一元的支配確立を狙っているのだ。米帝の標的にされているのが、ニカラグア、朝鮮民主主義人民共和国などである。

ことから、米帝のもくろみは、自ずと知れよう。国家テロリズムをもって、人民の闘いを押しつぶす決定を下した米帝は、国際法など歯牙にもかけぬ。今回のレバニア攻撃は、米帝にとり、延命と同義だ。反米・反帝闘争にレバニアが支援するのを、何とか止めさせたいのだ。世界中の反米・反帝闘争に対するレバニアの崇高な支援を断ち切らんとしている。米帝は、中米、および地中海を米帝支配に置かんとしている。

我々は、米帝の国家テロを許さない。反米・反帝陣営の全人民は、レバニアを支持し、米帝攻撃・米帝への反撃を強化していくだろう。悪の帝国米帝は、今後、広範な人民の闘いの標的であろう。なぜなら、核の脅し、圧倒的な軍勢力、多国籍企業によって、世界の人民に君臨するもの、これが米帝の姿だからである。搾取、貧困、悲惨の元凶、これが米帝だ。であるがゆえに、人民には米帝を攻撃する権利、義があるではないか。解放、自力更生にむけて闘う人民にとって第一の任務は、世界の至る所から米帝を叩き出すことなり。世界中から米帝を叩き出そう！反米闘争を展開するレバニア人民と

連帯せよ！

「土地の日」十周年記念集会でレバニア攻撃非難

PFLPハバシユ議長

一九八六年三月三〇日

今年の「土地の日」は、米帝の直接軍事攻撃、むき出しの干渉という形で、帝国主義・シオニスト対アラブの対峙の高まりの中で催されている。この攻撃は、パレスチナ革命のみならず、レバニア、シリア、レバノン民族主義勢力を標的にしている。また、アルジェリア、民主イエメンも狙われている。

この数カ月、米帝は、レバニア沿岸に艦隊を集結させていた。レバニア革命に敵対するキャンペーンを世界的に展開してきた。それから、数日前、レバニアを屈服させ、アラブ解放運動（とくに、シリア・レバノン・パレスチナの共同）の中でレバニアが果たしている支援的役割を放棄させるために、故意に、直接的に、レバニア攻撃に出たのである。つまり、反米・反シオニズム・反反動政策をとるレバニアに、そうした政策をとらせないよ

うにする、これが狙いであつたろう。レーガンは、リビアへのこの攻撃は、レーガン言うところの「テロリズム」なるものに対し、リビアがそれを増長させているので、それを抑止せんとしたのだと主張している。とんでもない大嘘だ。もう一年前になるが、ニューズウィーク誌で、表紙にもなったある記事を読んだ。ちょうど反リビアキャンペーン激化の頃で、確かに、ローマ・ウィーン攻撃よりもっと前の話である。件の記事は、米政府が、どうやってカダフィ大佐を除去しようとしているかの特集であつた。なるほど、今回のようなやり方で、テロリズムを片づけたというわけなのか。

それならそれで、南レバノンでのイスラエルのテロリズム、被占領パレスチナでのイスラエルによる鉄拳政策を片づけてほしい。

米帝が実際に目標にしているのは、パレスチナ革命、アラブのまたは他の解放運動支援のリビアに脅しをかけて、手を引かせることなのだ。したがって、米のこの傲慢さに対して断固として立ちむかうリビア・ジャマヒリヤとの完全なる連帯を、この場で表明したい。

帝国主義の攻撃のやり口と狙いか



米帝のリビア攻撃

三月一四日

リビアが各国の米大使館をひそかに調査しているという報告書がレーガンに提出さる。レーガン、この時点で、リビア攻撃を決定したという説ある（米紙の中には、国防省筋の情報として、「大草原の火」なる対リビア攻撃作戦があつたと、暴露しているものあり）。リビア沖で「恒例の」「海軍演習」を強行すると、国防省発表。APは、空母サラトガ、コーラルシー、アメリカの参加する大規模なものになろうと伝える。

一五日

リビアのトリポリで、第二回反帝・反シオニズム・反差別・反後進性・反ファシズム国際会議、開始。

一九日

カイロの国際見本市会場で、イスラエル館を「エジプト革命組織」が攻撃。シオニスト一名をせん滅し、数名負傷さす。

米ーイスラエル戦略合意に沿って、米軍事代表団、イスラエル訪問。

二二日まで、有事対処用兵器弾薬貯蔵、空挺軍事情報施設保管、合同訓練等について、討議予定。

・シムルツ、トルコ、ギリシア、仏、伊訪問旅行出発。

二〇日

・カイロでの攻撃に対し、ペレスは「今回のことで、対エジプト関係は左右されない」。レーガンは「エジプト人の反キャンペーン・デービッド風潮は、リビアの煽動による」。

二三日

・ワインバーガー

「米国は、八一年来、一八回もリビア沖で演習をしてきた。リビアの主張する「領海」を七回侵犯した」

二四日

・米帝、二〇隻で「演習」開始。

・リビア、シドラのミサイル基地からミサイル発射。米軍機三機撃墜。

・米帝、戦闘機で、ミサイル基地、ミサイル艦爆撃。

・リビア全土で反米デモ。リビア政府、国連安保理に抗議。

二五日

・米国防省声明

「米国は、合法的な報復権を行使し、リビアミサイル基地を攻撃せり。リビアのミサイルは米軍機に

当たらず」

・開会中の第八回アラブ連盟評議会は、急遽七カ国委員会を設置し、米帝のリビア領海侵略、攻撃を討議。

・リビア外相、駐トリポリアラブ諸国大使に事態を説明。

「この侵略行為は、アラブ航空機の安全な飛行、船舶の安全航海を脅かしている。リビアは、この侵略に対決し、シドラ湾への侵略を決して許さない。今後、米、NATO基地をリビアの敵対目標とみなす」

・シリア、アサド大統領の書簡を携え、カッダム副大統領、リビアへ。

・アルジェリア外務省声明

「（米帝の）力の誇示を非難する。おまけに、国連安保理常任理事国による力の誇示は、決して認められぬ行為。世界平和と安全のために、取り返しのつかぬことになる前に、両国とも自制を」

・イギリス労働党党首

「これは海賊行為。二〇世紀の時代に、いかなる国に対しても、力づくでものを言わせることは、どのような理由があっても許されない」

・米下院外交問題評議会議長

「議会にはかりもせず、リビア攻撃。これは、法と、軍の権威に違反」

・ペレス、レーガン絶賛

「米国は、公海上の自由を守る権利あり。リビアは、国際テロの親玉だ。近隣諸国に暴力と脅威を与えている元凶。テロルに対し、断固たる立場をとり、行動に移るこそ、世界平和、自由を防衛する土台なり。今回の攻撃は、時宜に叶い、正しいものであった」

・英政府、レーガン支持

「シドラ湾で海軍演習をする権利は米国にある。我が政府は、シドラ湾をリビアの領海とは認めていない」

・伊政府、米大使招請し、伊政府の憂慮の念、伝える。

二六日

・アラブ連盟評議会、満場一致で、リビア支持表明。

・マルタ政府、国連安保理議長に、地中海中央部情勢につき、安保理会議招請を書簡で要請。

・PFLP、DFLP、リビア支持

PF 「この闘いは、リビア一国の闘いに非ず。この闘いは、世界のまじめで、進歩的で、自由を求める人々の（反米）闘争

なり」

DF 「リビア人民の反米闘争に連帯し、我党は、我党の全財産、全軍事力量をリビアの自由に活用してほしい。対米ボイコットを」

・UAEのイッテハド（統一）紙

「アラブ諸国が沈黙を守っているとは、おどろきだ。米とイスラエルがアラブを制した時のあの痛み、無念さは、今、何処なりや」

・ローマ、ミラノで、総勢八〇〇〇人の学生が反米デモ。

・北イエメン、リビアの勇敢な立場を賞讃。

・エジプトのNPP（国民進歩統一党）党首、パリのリビア大使館に電話で連帯表明。

中国、「国際関係の常識にもとる」と米批判。

・WPC（世界平和評議会）、米帝非難声明配布。

・米黒人リーダーのジェシー・ジャクソン

「レーガンがリビア挑発を前から狙っていたのは明々白々。レーガンは、リビア、ニカラグア撃破の夢にとりつかれている分、危険だ」

・シムルツ、アテネで米軍基地問題をギリシア政府と討議。

二七日

・米帝、予定より四日早く、「演習」切り上げ。

・ゴルバチョフ、米非難。

資料②

米国紙の評論分析

一 ニューヨーク・タイムズ

「今回のリビア攻撃の目的は、シドラ湾が公海か、それとも、リビア領海かという問題に結着をつけるとされているが、果して、そうか？ それよりも、リビアのテロリズム支持を止めさせる、対テロリズムキャンペーン、経済制裁を主張はしても、有効な手段を講じえなかった米の面子を保つことが本当の目的であつたろう。軍事目的の達成度は、中途半端だ。リビアの軍事能力本体は無傷なうえ、標的のSAA-5Aミサイル基地も全滅させていない」

また、カーターの「中東問題顧問であつた専門家の分析は、リビア攻撃の目的は、リビアがテロリズムを支持していることではなく、リビアが隣国（エジプト、チュニジア）に与えている脅威を何とかしたいというのが本音だろう」

「公海上の演習云々は建前で、本当は、トリポリとマナグアのならず者を始末したいだけであろう。レーガンは、これをほかにしている。対ニカラグアコントラへの一億ドル援助要求も、これで中米は、全て片がつくという調子だが。もっと政治目的をはっきり出してほしいものだ。二、三の政府の首のすげ替え、リビアが後押ししているテロリズムの軍事制圧、これをやりたいのだと、レーガンは、はっきり言っている。米下院は、意見が多岐にわたるも、レーガンのやり方では問題は片づかぬ、この点では、一致している。今回の攻撃を受けて、リビアは、おとなしくなるだろうか？ むしろ逆だろう。カダフィ支持は、死を神の酬いとみなす連中、我々とは価値観の違う人間が多い分、むこう数カ月の間に、米から受けた軍事的屈辱を、どうお返しするかが、明らかになる。レーガンは、対レーガン聖戦布告をしたようなものだ」

二 ドリュウ・ミドルトン

「八五年、中東訪問した折、エジプト、ヨルダン政府関係たちは、テロリズム反対の立場であった。が、情報将校たちの話では、イスラエルの軍備・財源を保証する米国に対するテロリズムを、人々が広く支持しているとのこと。

ソ連の反応。ソ連の黒海艦隊は、攻撃用艦船を含んでいないので、軍事的な反撃をかける態勢にない。ソ連が何もしなければ、米は、リビア攻撃はしかけたものの、中東の微妙な小康状態を破ったという失点のみになる」

三 ロスアンジェルス・タイムズ

「三月二四日の攻撃は、米の筋骨き通りに運んだように見える。外交攻勢から、軍事攻勢へとステップアップし、「手を引け、逆らうな」という警告をカダフィに与えただろう。なぜこうもリビア制裁に熱を上げるのか？ 米国内で、テロリズムが跋扈したら困るからである。

成果はどうか？ 対テロキャンペーンの責任を一定果した。口先だけの作っただけ。中東テロルの根本問題の解決に到らなかったとしても、次に、ソ連に反米の格好の口実を与えた。とくに、現在、アフガン春季攻勢中なのに、国際世論の目を、わざわざリビアに向けてやった。リビア、ニカラグアの方に、相対的な歩があるという現実から欧州各国は、米の勝手なやり方、我が道を行くというあり方に対してとまどうだろう。中東レベルでも、カダフィは、ソ連からますます近代兵器を引き出そうとするだろうし、アラブ諸国も、表面上は、リビア支持せざるをえない。カダフィは、とくに、エジプト、チュニジアという親米国家内の反政府感情煽動のカードを手に入れた。カダフィは、大打撃を受けていない以上、反撃に出てくるだろう」

資料③ アザニア人民慰撫戦術

① 南ア在住ユダヤ人は一二万人とされる。

② ヒスタドルトは、アフリカ・アジア研究所という施設を設置し、七一年から八六年の一年間に、一万五〇〇〇人に技術・指導訓練をほどこしてきた。うち八〇〇〇人がアフリカ人。ヒスタドルトは、反アパルトヘイトを掲げ、南アの白人専用労組との関係作りを拒否してきた。シオニストは、①イスラエルと南アのアフリカ人との対話、②米国内黒人とユダヤ人との緊張緩和を計り、ペレス代表二名を含む実行委員会のようなものを米国で設置。これには、ツツ師も参加したようである。反アパルトヘイトの全潮流を工作していたので。

八五年、六月、イスラエル同和相が南ア訪問。南アのユダヤ人をイスラエルに移住させる陰謀。八六年、三月、同相、南ア再訪。八六年度の南アユダヤ人移民を前年比二倍の六〇〇人にするため。イスラエルの本音に対し、ツツ師など民主的人士は、同相の訪問に対し、抗議活動。

資料④ エジプト経済と農地法改悪攻勢

① 人口 五〇〇〇万人以上（推定）

② 出生率 年／二・八％

③ 経済五カ年計画（八二／八三）

投資総額 五〇億四四四万ドル

公共セクター 三八四億四一三万ドル

民間セクター 一七億四三一九万ドル

④ 国家予算（八二／八三会計年度）

歳入 一二八億五九〇〇万ドル

歳出 一八八億五〇〇万ドル

（八三、八四年度、海外出稼ぎ労働者からの送金、各一八億ドル。ガルフ地域からの出稼ぎ労働者送金が五億ドル減収）

⑤ 現在の対外負債 三一〇億ドル

⑥ 主要輸出入相手国

単位／100万ドル	
輸出総額	3,120 ('82)
伊	689
仏	216
オランダ	170
輸入総額	9,077 ('81)
米	1,727
仏	681
西独	699

⑦ 対日貿易（八三年度）

単位／100万ドル	
輸出総額	257.2
綿	72.2
鉱物性燃料	175.1
輸入総額	851
重化学工業品	740
軽工業品	89.8
食料品	19.3

⑧ 労働雇用労働人口 一一七二万人

（八一／八二）

失業率 約一〇％（推計）

⑨ 食糧輸入 一日八〇〇万ドル

（八五）

（ただし、人口の半分の需要しか満たせない）

⑩ 外貨収入源の減少

イ 出稼ぎ労働者からの送金（④参照）

ロ 石油収入（規模不明）

ハ スエズ運河通行料 三〇〇〇万ドル減

ニ 観光（過去、年間平均収入一億ドル）現在、第二次大戦来、最低。解約率五〇％

⑪ エジプトポンド切り下げ 九〇％

⑫ 農地法改悪

エジプトの農地面積は、国土の四〇％、農業関連人口は一〇〇〇万人と言われる。うち、地主が五〇〇万、小作・農業労働者が五〇〇万人。農地改悪法は、五二年に制定された。小作権擁護のための農地改革法が、現在の地主に不利。なぜなら、小作農（農地を賃貸して、農業に従事）は、換金作物栽培、第三者への（賃）貸し自分は出稼ぎなど、現金収入を増やしているのに、地代は、三〇年前の法規制下」と地主側は要求。改悪すべき点としては、イ 小作権の譲渡を認めない。父

から子へ引き継いできた小作権の否定。新契約を交す。

ロ 地主の解約権の承認

ハ 農地売買規制の緩和

二月来、CSF叛乱問題で隠され、大きな話題にはなっていないようにみえても、この農地法改悪策動は、エジプト人民の関心の的なのだ。国会で論争になっている（法案として上程中）。政府の側では、構造不況の煽りを受けて、年間四〇万もの帰国労働者の職と食の問題解決をどのようにしようとしているか、次にみてみよう。

大枠は、

イ 都市に流入させないように、人口希薄の砂漠開発し、帰国労働者に払い下げる。

ロ 技術未熟練労働者層を農業部門へふりわけ、農業生産をあげる。

ハ 帰国労働者は、貯蓄の乏しかエジプト国内に投資していないので、総額七〇億ドルともいわれる彼らの貯蓄を国内投資に回すよう奨励。



エジプトCSF（中央治安軍）の叛乱について

「大衆的支持または軍も支持していたということは絶対ないですな」

在レバノンエジプト外交官 アスカラニ氏

一、CSF叛乱問題は、すっかり解決されたか？ それとも再燃の危険があるのか？

そもそもCSFとは何か、CSFの任務は何か、そこから話を始めるのが重要だ。CSFは警察に付随し、警察がより大きな治安維持、犯罪取り締まりに専念できるようにするために設置された。CSFの任務は、公官庁、外国大使館の警備、公式訪問した外国要人の身辺警備、暴動鎮圧では警察の補佐。我が国では、軍隊に新兵が来ると、学歴の高い者を残し、高卒前の学歴の者は三年間のCSF勤務に回す。CSF配属になると、三〇日間に五日の休暇、無給ではあるがボーナス支給を受ける仕組みになっている。だいたいが、農村出身者がCSFには多いので、もう御存知と思うが、ギゼー

の暴動は、CSFの勤務が三年ではなく四年に延長されるという噂に端を発した。実際、もう一年勤務という事になったら、生活を脅かされるというので、彼らは暴動に走ってしまった。しかし、注目すべきことがある。エジプト人民大衆、警官、軍人から何の反応もなかった、これだ。

CSFはだいたい二万五〇〇〇の兵力だが、暴動に走ったのは、三〇〇〇人位。エジプト政府は、実情を把握し、叛乱のもたらした結果をつかみ、二度と、こうしたことが起こらぬような措置をとるものと考えた。

二、叛乱は、実は政府打倒、キャンプ・デビッド政策の破棄をめざしたものであったのか？

それは、全く間違いない。あの暴動は、ある特別の理由から一定のグループがやったものでしかない。他の理由があるならあるで、政府の法的手続き、調査によって、やがてわかるだろう。

だが、今、私が指摘したように、人民大衆からは、何の反応も引き出さなかったし、キャンプ・デビッドやら現政権やらとは、何の関連もないものなのだ。エジプト政府は、しっかりと安定しているし、転覆を企てるような動きが皆無なのだ。これを、よくわかってほしい。

政府は国家問題を取り扱っている。四八時間以内に正常に戻したということからみても、政府の力は、疑いを待たないではないか。また、ギゼーの暴動では、騒ぎが大きかったと言っても、死者は三名のみ。うちCSF側が三二、軍が二、民間人が二でおさまった。他のマスコミが何と宣伝しているか知らないが、これが本当なのだ。

三、暴動の背景に誰がいるのか？

現在、まだわかっていない。今は、法的調査段階で、結論が出次第、エジプトおよびアラブ人民、それから世界的にも、発表していくことになる。

四、この暴動と、中東情勢との関係。とくにパレスチナ問題とガルフ戦。

ここ数年、中東は紛争に次ぐ紛争であった。その理由の最大のもは、アラブが統一を欠き、目標、目標達成の手段で意見がバラバラだったからである。

らである。アラブが理解、認識の枠で一致できず、方法において合意できない時、中東の紛争、緊張が続くことになる。

五、CSFの叛乱は、個別CSFの隊員間に止まらず、軍・警察との紛争になったことだ。

はっきり言うておくが、紛争と言われるほどのものは何一つなく、あるグループが流した噂により煽動された不満でしかなかったのだ。しかし、エジプト軍と警察は、事態の収拾に十分な連携を示して、暴動を鎮圧した。四八時間でおさまったというのが、何よりの証左である。

六、CSFの叛乱について、最近のエジプト経済危機が火つけ役になったか？

現在、困難な経済状況下にあるという事は、エジプトも認めることである。しかし、経済危機にみまわれているという点では、どの国も同じ。豊かな産油国すら青息吐息、こうした世界的な不況下の一つの現象なのだ。

明らかに、この経済危機がエジプト

ト人の生活条件に影をおとすということがある。しかし、それよりさらに重要なことは、経済危機克服にむけて、建設、生産にエジプトが力を入れていくという面だ。この意味で、生産の拡大は情勢の安定、エジプト人の誰もが経済的困難に甘んじなくてはならない（個別CSF隊員だけに非ず）のだが、それに耐えられぬ部分が反発したということで、いわば、予測したこともである。にもかかわらず、CSFの暴動に国民的共感なり反応なりはなかったわけである。とすれば、経済的危機が原因ということとは成り立たないではないか。

七、シリア大統領は、エジプト人民の前で、キャンプ・デビッド合意を破りするようエジプト大統領に期待しているとか、述べている。そういうことが可能だろうか？

ムバラク大統領が、合意破棄を考えたことはなかりうし、現実的な考えでもないと思う。そうしたら、何か良い結果が生じるというわけではないから。キャンプ・デビッドは、二つの文書がある。最初のは、イスラエルとの関係作りと交換のシナイ

半島返還。この問題は、文書確認に従って、実行された。だから、この文書を破ろうと破るまいと、エジプトはシナイに主権を確立し、イスラエルと和平を結んだ事実は、不変だ。それに、この文書は、今や歴史的なものとして残るだろう。

次のものは、パレスチナ問題をエジプト・イスラエルで共働して解決していこうというものである。両国で三〇回も会議したのだが、イスラエルが頑固に譲らない分、物別れの尽。そして、イスラエルの政策の結果、パレスチナ問題に関する部分は、凍結状態にある。が、アラブ全員、外国の数カ国も賛成している国際会議方式が、現在、イニシアチブとして浮上している。

八、キャンプ・デビッド合意の後半というか、第二部が停止されているのなら、第一部に対するエジプトの責任も解除ということにはならないのか？

先述のごとく、第一部は、すでに終了したものである。第二部についても、我々は、個別パレスチナ問題解決という枠を越えた、中東和平のための国際会議を提唱している。ア

ラブ総体が、そういう国際会議を要求しているのだから、それを成功させるのが、アラブ全体の責任としてあるだろう。

九、アル・アハラム紙によると、イスラム過激派も最近のCSF暴動に加わっており、ジハード機構のメンバーが逮捕されているとのことだが。

私のところには、そういう情報は入っていない。CSF暴動に影のくろみがあったのかどうかを、現在司法当局が調査中だ。アル・アハラム紙の情報は、そういうことがありうるだろうとは思いますが、はっきりと断言できない段階だ。

一〇、エジプトは、なぜ、レバノン問題の解決に努力しないのか？

レバノン危機発生来、エジプト政府は、解決にむけて、できる限りのことを行ってきた。しかし、レバノン問題は、何よりもまず、レバノン人自身の問題であること、次に、レバノン人自身が危機解決の方法について一致していない限り、いかなる国が介入しても、真の解決策たれない、こう考えている。レバノ

ンは、イスラム教徒、クリスチャンを問わず、レバノン人の国であり、レバノン人自身が平和再建、治安、安定の再建で一致していくことが先決と思う。

エジプトが、レバノン問題に手を染めたくないと考えていると思わないうでほしい。エジプトは、努力を継続しているし、各派との接触も保っている。さらに、エジプトが欲するのは、一〇年前と同じように、レバノンが繁栄の姿を取り戻すこと以外にはないのだが、レバノンは、この点をわかってきている。両国人民は、昔から、非常に親しみあっていたし、ヨーロッパ旅行するよりもレバノンへ行った方がよい、エジプト人は、こう考えているわけだ。さらなる悲劇、惨禍にしかならない戦争を止め、政治交渉に入るよう、エジプトは、レバノン各派に対し、働きかけている。我々の目的は、平和、安定、治安をレバノンにもたらすことなので、そうした展開もひっそりと、騒がしいプロパガンダめきで、やっているのだ。

一一、エジプトは、イスラエルと関係があるのだから、南レバノンから撤退するように、イスラエルに工作

できないのか？

イスラエルのレバノン侵略に抗議し、エジプトは駐イスラエル大使を召還した。イスラエルがレバノンから撤退しない限り、大使を送らないと通告してある。エジプトの基本政策は、ここにある。さらに、レバノン国家、レバノン各派の要請も受け、自発的にも、ことあるごとにイスラエルに対し、その要求を出してきたが、いくつかの確約も得ている。

一二、次のアラブサミット召集となったら、エジプトも招請されるのだろうか？

それは、アラブサミット招請側の意向一つだ。たとえサミットに招請されないとしても、アラブの団結を作り、強化していくための全ての措置支持が、エジプトの基本姿勢だ。

現在、エジプトはアラブ連盟の会議にも参加していないが、これは不自然であり、いずれ参加要請をうけることになる。アラブ世界の救済、二一世紀へむけたアラブとしての準備にむけて、アラブの団結をいつ修復するのか、それによって、エジプトの復帰問題が射程に入ってくる。

資料⑤

「テロリスト連邦」国家の反論

八五年七月、レーガンが進歩的国家を「テロリスト」呼ばわりした。それへの反論

一 キューバのカストロ首相

レーガンこそ、人類史上最悪のテロリストではないか。なぜなら、エルサルバドルにおいては、人民虐殺のみならず、米国の尼僧を強姦した軍隊を支持した。レーガンは、そんなことをしたのだ。

このほど、キューバ、ニカラグア、朝鮮民主主義人民共和国、イラン、リビアを「テロリスト連邦国家」と非難したが、レーガンのこの宣伝の仕方は、白を黒と言いくるめるゲッペルス流のナチの宣伝手法だ。

レーガンは、歴代の米国大統領でも最悪の嘘つきだ。どうみても気がふれているし、寄食者だ。どう考えても、彼の主張をまともに聞く気になれない。きつと、レーガン自身、自分で何を言っているのかわからないのでないか？ 彼の考え方とときたら、西部侵略時代のバッファロー・ビルもどきで、とても、現代の核

の時代のものではない。

レーガンが躍起になって、我がキューバを「テロリスト連邦」の一員とこきおろすのはなぜだろう。それは、ラテンアメリカ債権国に、キューバが返済拒否ストを呼びかけ、このキャンペーンが反響を呼んでいるのだが、いたくお気に召さず、とんでもないことになりそうだと、苛立っているからだろう。

二 イランのフセイン・ムサヴィ首相

我が国は、飛行機乗っ取りには反対です。ただ、あらゆる反米・反イスラエルテロは、根本原因をワシントンとテルアビブが作ってきたという事実、この根拠を忘れてはなりません。

三 ニカラグア（駐米ニカラグア大使館声明）

我が国は、あらゆる形態のテロリズムを非難します。なぜなら、ニカラグア人民こそ、大げらに、恥ずかしげもなく米政府が奨励し、CIAと米国防衛の反政府組織がしかけてくる米国防衛テロリズムの犠牲者だからです。

四 リビア

レーガンに指名された国々は、世界支配の野望に基づく米国の政策に反対した国々だけです。この米国防策とは、未来の核対立時、米国防に敵対する側に対する優位性の保証を、目標にしたものです。

米国の世界支配戦略に對峙するこれらの国々の規模をみて、米国民ですら、なるほどと肯首すると思えます。ただ、自国の主権を守ろうとしているにすぎぬこれらの国々の態度を、例の飛行機乗っ取りと、無理につなげただけです。飛行機乗っ取り事件は、全く目的が違うというのに。それに、飛行機乗っ取りを、それほど云々するならば、一番飛行機乗っ取りが多いのは米国防自身なのですが、自国内の帝国主義政策にうんざりして、乗っ取り事件を起こす人間がこんなに多いということを、レーガンは、考えてみた方がよいのではないのでしょうか。

資料⑥

対テロ勧告案と対テロ法案

ブッシュ指揮下、数カ月間に及ぶ対テロ対策審議会が「練り上げた」

勧告案（主なもの）

一、テロ問題専門研究の諜報センター設置
二、テログループ内への潜入努力強化
三、海外の米国民殺害について、最高刑として死刑を科す連邦犯罪とする法案を下院主導上程し、成立させる

四、テロリストを法の裁きにふすのに努力した者に対し、一〇〇万ドルの賞金
五、法務省は、犯人引き渡し条約を各国と締結
六、マスコミ

国家保安関連の問題について、戦時下では、どう報道するか、マスコミ側がすでにガイドラインを作ってきている。テロリスト情報についても、ガイドラインを作って、徒らにテロリストの政治宣伝を助けないように七、NSC（国家保安評議会）に、国家としての対テロプログラムと共同する担当官を新設する
八、（出入国管理）
九、両院委員会設置により、結局は、テロリストに関する内部情報が流れるのを防止
一〇、（情報公開自由法改悪）

テロリストに利用される恐れのある情報公開は、情報公開自由法を規制していくことが望ましい

一、（報復）妥当性の基準作り

一、テロリストの素性がわからなかったり、テロリストの標的がつかみにくいという条件があるので、実行委員会が基準を作り、NSCに提出のうえ、認可を求めること
二、関係のない市民が巻き込まれることに加え、報復は、正確さ、情報の信頼性、予防反テロ作戦、報復への反応、標的特定能力等を十分検討すること

二、テロリストグループの守護国の協力、または反発を考慮すること

同審議会報告によると、八五年度のテロ活動は八〇〇件（前年度比二〇〇件増）、うち三〇％が反米闘争。過去一〇年間の統計でみると、一七日ごとに一回の割合で、反米闘争があった。また、その一七一年間に殺された米外交官数は、過去一八〇年間に殺害された米外交官の数をしのぐ。

米下院通過の「対テロ法案」

今後五年間に、四四億ドル予算で、在外米公館の半数（126/262に相当）の

保安措置再建を行う。（八三年、八四年の在レバノン米大使館、米海兵隊本部爆破の教訓から）

・対テロプログラム

一、国際テロリスト、麻薬密売人情報に対し、一〇〇万ドルの賞金。
二、七九年米、海外で人質にとられた米外交官、軍人、契約労働者に対し、日/六六ドルを上限とする保証金給与。

ハ、米国防衛、空港保安改善予算として、一・二五億ドルを計上する。
ニ、在ソ連、東欧諸国の米大使館要員を全員米国民で担うための奨学金制度を設置する。

ホ、在外米公館の保安要員増強のために、一六億ドルを予算計上する。

資料⑦

「パチカン・イニシアチブ」支持

シャルル・マリク

「レバノン」は、元来「国際化」された問題なのだ。レバノンの地理上の戦略的条件からしても、東地中海世界では、レバノンは、有機的な一部であった。こうした客観条件からして、国際方式でレバノン問題の解決を計るのは、合理的なことだ。

とくに、近代にあつては、シリアはADFにより、米・英・仏・伊はマルチ軍により、イスラエルは自国軍により、何とかレバノン問題に介入しようとした。ところが、どの「国際化」も失敗している。

また、現在、レバノン国内には、危機解決能力のある主体がない。したがって、外部からの援助を待つべき。パチカン・イニシアチブの可能性は、どうか？ 歴史的にも、八一年四月、ザハレ危機の時、教皇は米

国に対し、介入してくれた。今後、教皇なら、米・仏・シリアに対し、工作展開することができよう。
イスラエルとの問題について。
イスラエル無視のむきもあるが、シリアの隣に、軍事勢力として、厳然と存在しているではないか。現在エジプト一国のみが、イスラエルとの和平関係を作っている。技術的には、この和平は、未だ脆弱なものでしかない。パチカンは、イスラエルとの外交関係がないので、イスラエルとアラブの和解工作しようにも、外交ルートが欠く。しかし、教皇は、近くローマのシナゴグ訪問を予定されており、ルートを作っていくものと思う。

資料⑧

レバノン南部レジスタンスは証言する

一 ジュバイエル・アマル孤児院の闘い

ハサン・カシル烈士は、同校の生徒であった。彼は、爆薬を満載したメルセデスベンツを駆ってイスラエル侵略者共に突撃した。ペイルートの新聞は、一〇〇名の侵略者が殺傷されたと報じている。彼の決死作戦を、友人の一人が同校の窓からビデオ撮影した。

その二日後イスラエルは、同校の捜査に乗り込んだ。このドアからは、通さない」と、フセイン・ムシムシがドアに立ちはだかった。イスラエル兵共は、フセインを蜂の巣にして、乱入。この孤児院は、南レバノンが侵略・占領されていく中で、家族を失った子供たちの生活・勉学の場であった。イスラエル共は、図書、カンパ箱、ありとあらゆるものを打ち壊し、金目のものは盗んだ。孤児、先生方を、冷雨の校庭に整列させ、一人ずつ呼びつけて、尋問した。「一昨日、決死闘争をやったのは、誰だ？」「そいつの友人の名前

を言え」「誰がダイナマイト詰めメ
ルセデスをハサンにくれたんだ」。尋
問は、三日間。その間、冷雨は続い
た。その間、孤児と先生方は校庭に
並ばされた。誰も、イスラエルに何
一つ言わなかったのだ。

二 サナ・モハイダリ烈士(二六歳)

一九八五年、四月九日、二〇〇kg
の爆薬を満載した車を駆りイスラエ
ル兵共々突撃。サナの育った村アン
クーンは、サイダ近郊。三月二日、
イスラエルの急襲を受け、村人二三
名が殺された。その四日後、彼女は、
西バイルトにある自分の家を出た。
新しい友人には、もう二度と帰って
こないともらしていたそうだ。

四月九日夜中、バイルトのTV
は、サナのメッセージを放映。彼女
は、告げる――

「人々が占領・抑圧の屈辱に苦し
み、子供たち、女性、男性が殺さ
れていくのを見たので、私は、行動
に移るつもりです。レバノンの土地
と人々の解放のために、自らの生命
を捧げるグループに、私は入ってい

ます。私は、これから決死闘争に出
かけます。

私がそうするのは、平和を愛すれ
ばこそなのです。レバノン南部の青
年たちに訴えます。『レバノン国民
レジスタンス戦線』に結集し、闘い
を発展させようではありませんか。
お母さん、さよならも告げずに行
くことを、お許しください。お母さ
ん、私は、祖国レバノンへの愛を貫
くために、死ぬいとわないうで出撃し
ます。どうか、この気持をわかって
ください。

私が死んだら、仲間の烈士たちの
魂と逢い、敵イスラエル兵の頭を、
雷のごとく、打ち砕いてやりたい」
人々は、うら若い彼女の決断を讃
え、「南部の花嫁」と呼んでいる。

資料⑨ アマル運動第六回大会

「烈士と建設の大会」と銘うち、
八三年来、三年ぶりに開かれた。議
題は、レバノンの総体的政治情勢(ナ
ビーハ・ベリ)の政治基調報告、ア
マルの政治的態勢、第五回大会来の
諸問題であった。

し、部分的なるも根本的な勝利を獲
得したことを、人民の政治参加をレ
バノン史上初めてかちとったこと、
米海兵隊、マルチ軍を追放し、米政
府の言いなりにならぬことを示した
ことを、成果としてあげている。国
内レベルでは、今まで特権体制(宗
派政治、とくにファランジ党などマ
ロン派の独裁下)にあえいでいたが、
これを実力で転換したこと、今後、
どんなグループにも支配を許さない
こと、貧しく、虐げられた人々の劣
等感を、こうした勝利によって克服
したことを挙げている。

「土地の日」十周年にあたり
「土地の日」十周年声明

PFLP、ハバシユ議長演説主旨
一〇年前の三月三〇日から三日間、
四八年来の被占領パレスチナで、数
十万のパレスチナ人民が決起し、シ
オニストによる土地略奪、パレスチ
ナ人民民族性抹殺に對して、大胆な「ノ
ー」/「とんでもない」/と声を一つ
にした。西岸・ガザのパレスチナ人
民も、同じだった。市長、町・村議
会の呼びかけに応え、ナザレ、タイ
ベ、サハニンで、ガリリーの村々で、
人々は、デモに集まった。パレスチ
ナ人民の唯一合法の代表であり、パ
レスチナ人民の指導部たるPLOの
もと、パレスチナ人民が、どこにあ
ろうとも統一されていることを体现
するものであった。

東最強の軍隊に對し、素手で立ちむ
かった烈士の闘いであつた。このこ
とだけは、言いたいのだ。自分たち
先祖伝来の土地を守ろうとして。

さて、この闘いから、我々は教訓
を導き出さねばならない。それは、
一、土地を手離さないこと

パレスチナ人民は、土地を守りぬ
いてきたし、これからも、どんな勞
苦もいとわずに守っていくだろう。

土地、自分たちの大義に最も関与し
ているのは、パレスチナ人民だ。な
ぜなら、土地も国も彼らのものなの
だから。シオニストの不正な占領に

抗し、土地を守るために、生命を捧
げ、身体を張ってきたのも、アラブ
人民と、そして、パレスチナ人民自
身だ。この土地を詐欺し、安く売り

叩いた奴らから、土地を守るために、
多くの烈士を出したパレスチナ人
民は、あれこれ忠告を受けずとも、
よくわかつている。それなのに、フ

セイン王と茶坊主共は、パレスチナ
の土地と、パレスチナ人のために、
嘘涙を流してみせる。

二、統一
パレスチナ人は、全員がパレスチ
ナ人民であり、分裂を許さない。我
が革命の道程で多くの紆余曲折があ

ったが、そのたびに、一つの人民と
しての統一を証明してきた。「土地
の日」にあたり、再び、パレスチナ
人民が統一として存在しているこ
とを証した。

一九四八年、パレスチナでの大衆
蜂起の時、西岸・ガザのパレスチナ
人民は、やはり蜂起で呼応した。ア
ラブ各国のキャンプにいるパレスチ
ナ人民は、反動政権下では弾圧され
ていても、やはり、四八年、六七年
に占領されたパレスチナ在住の同胞
に連帯している。

言うまでもなく、PLOが達した
地平なく、大衆の蜂起は、これほど
の規模にはなるまい。

三、二つの土台
「土地の日」蜂起は、現代パレス
チナ革命が、相互補完しあう二つの
土台に立脚していることを示してい
る。第一の土台は、被占領祖国内で、
シオニストの土地略奪、セツル建設、
追放、「文官」行政(注1)治安・警

察は軍が握っている)、「自治」(注
2)現在、親ヨルダン、親イスラエル
潮流に「文官」行政を移管しようと
している)に抵抗して闘っているパ
レスチナ人民である。第二の土台は、
祖国の外で、武装闘争、政治、大衆

闘争を闘っているパレスチナ人民で
ある。過去の経験を総括してみれば、
この二つの土台が相互連関し、相互
影響しあうことが明らかだ。PLO
がアラブ、世界レベルで達成した成
果(七四年ラバト会議での決議IIパ
レスチナ人民の唯一合法の代表権承
認、七五―七六年の国連総会決議)
なく「土地の日」蜂起とそれに続く
広範な大衆蜂起はありえなかったこ
とだろう。

同様に、被占領パレスチナでの断
固たる闘いがなかったら、パレスチ
ナ革命は、キャンプ・デービッド策
動と「自治」のもくろみを頂点とす
る敵の攻勢(パレスチナ革命抹殺)
に對して、これほど断固として闘う
こともできなかったはず。おかげで、
ヨルダン、エジプト、イスラエル政
府と通ずる裏切者共を孤立させ、敵
の陰謀をうち砕くことができた。

サダトがキャンプ・デービッド合
意調印してから、エジプト政府は、
西岸・ガザの同調分子に「賛成」を
言わせようと、あれこれ策動した。

同調者共は、代表団なるものを作っ
て、サダトへの支持表明のためカイ
ロ参りに出かけようとした。しかし、
裏切者ハザンダルを刺殺して、パ
レスチナ人民は、この陰謀にピリオ

ドをうった。
したがって、被占領パレスチナの
内と外とのパレスチナ人民の統一が、
パレスチナ人民の統一を強化してい
くのである。

四、土地が最重要課題だ
イスラエル国家でつち上げ以前か
ら、敵シオニスト共は、一貫して土
地を重視してきた。パレスチナ人民
の追放、パレスチナ人民の民族性抹
殺を行い、パレスチナと名のつくも
のが全て崩壊した跡にシオニスト国
家建設をもくろむ奴らは、土地略奪
を最重要課題とみなしてきた。イス
ラエル国家は、これを公式政策とし
てきたし、だからこそ、歴代の政権
が、最もおぞましいやり方で土地を
奪取し、人民を追放するのに血道を
あげてきたわけ。

「土地の日」の闘いとは、ガリリ
ーと三角地帯の二万一〇〇〇ドナム
(注1)だいたい、二万一〇〇〇ヘク
タール)の土地略奪を許さぬための
ものだった。敵シオニスト共は、力
づくで抵抗し、力で追い出さない限
り何も譲歩しない。今、投降主義的
な陰謀に加担している人々に教訓と
してほしくて、この「土地の日」の
意義について言及した。こうした多

くの陰謀にピリオ
ドをうった。
したがって、被占領パレスチナの
内と外とのパレスチナ人民の統一が、
パレスチナ人民の統一を強化してい
くのである。

くの闘争を経て、我々は、その価値を新たに想起しようではないか。
シオニズムが、土地を盗みとる。これは火をみるより明らかだ。なのに、実力以外の方法で敵シオニスト共をパレスチナから追い出せるかもしれないと夢想するようなことが、まともな人の考えることたりえるだろうか？

今日、失った土地を嘆く人々がいる。嘆くよりも、どうやって奪還するのか、それを言うてほしい。彼らは、敵の手を運命をゆだね、米国式解決策へむけて金カードを出してしまっただけだ。

五、闘争

土地を保持し、占領された土地を奪還するためには、あらゆる手段、とくに武装闘争をもつて、したたかに、息長く闘争展開するしか道がない。これが前進の道である。革命を損い、PLOを損い、人民と人民の正義性をも損うような解決策を、幻のごときものでしかないのに、追い求めてはダメなのだ。

敗北と投降をささやく人には、我は、こう言う。土地の日の教訓をつかめ。土地を守るために、同胞のパレスチナ人民が、素手で闘っ

たのだ。デモし、座りこみ、土地防衛の委員会を組織しあつて闘った。彼らは、ありとあらゆる方法を駆使し、我々に闘いの方法を教えてくれたではないか」と。

「土地の日」万歳！

反帝・反シオニズムによって団結するPLO万歳！

アラブ民族解放運動、万歳！
大義に生命を捧げた烈士たちよ、永遠なれ！

「土地の日」記念 連帯あいさつ

ICSS 在ダマスカス
(サブラ・シャティラ虐殺を許さない国際委員会)
一九八六年三月三〇日

パレスチナ人民との連帯を展開している友人の皆さん

「土地の日」(十周年)を記念し、ICSSは、全ての友人、グループ、運動、組織が、パレスチナ人民との連帯活動をさらに活発にするよう、訴えます。世界中が、平和実現にむけて大きく動いている八六年、「土地の日」の闘いも、今まで以上の大きな意義があります。なぜなら、中東総体、とくにパレ

スチナの政治情勢は、大変危険であり、複雑化しております。帝国主義が核軍拡の拍車をかけ、世界各地で軍国主義を起し、再生させている分、世界を爆発寸前まで押しやっているのです。こうして、世界情勢も、複雑化してきています。

それだけでなく危険な状態にある中東情勢は、さらに複雑に錯綜し、緊張はいやがうえにも高まっているのです。中東での緊張、危険性を高めている主要素は、イスラエルへの継続した、かつ拡大傾向にある軍事支援なのです。帝国主義は、パレスチナアラブ解放運動のみならず、世界の進歩勢力、社会主義国に敵対する基地、NATO基地、とくに米帝用基地としてイスラエルを育ててきました。米イスラエルの「戦略合意」なるものを見れば、これは火をみるより明らかです。

今日、イスラエルは、ラテン・アメリカ、アフリカの反動諸政権にとって最大の武器商人です。最近では、「スター・ウォーズ」に参画しました。イスラエルが地域、国際レベルで果している帝国主義的役割に加えて、被占領パレスチナでも、パレスチナ人民に対して、最悪の人種差別ファシスト流野蛮な弾圧を加えてい

る点を見逃してはなりません。イスラエルは、西岸の町村をユダヤ化し、パレスチナにもともと住んでいたパレスチナ人を体系的に追い出す策動を進めているのです。次のようなやり口です。

- (1) この数カ月間、主要な民族主義幹部をパレスチナからヨルダンへ追い出すキャンペーンを行っています。まず、何の罪状もないのにこうした幹部を拘留しておいて、軍法裁判所の決定一つで(裁判ぬき)、追放処分にするのです。パレスチナ人民からその地域のリーダーを奪うことを企てているわけです。戦争大臣ラビンの言によれば、一九八五年五月―十二月の期間に、「行政拘留」法に基づいて拘留したパレスチナ人は一〇〇〇人にもなるそうです。
- (2) アラブの土地強制接收、接收した土地にセツルメント作り。イスラエルは、六七年來、西岸・ガザの五二%の土地を接收し、一六〇カ所のコロニーを作ったのです。奴らの狙いは、パレスチナ人を追い出し、シオニスト入植者の国にしてしまうことです。
- (3) 被占領地区のアラブ経済下部構造破壊

工業、農業、建設、観光産業は、現在、ほとんどがイスラエルに牛耳られています。最近の動きとしては、パレスチナ電力会社を閉鎖させ、イスラエル電力会社の送電線による電力「供給」を強制しています。

(4) パレスチナ文化、表現の自由

何千人という画家、作家、ジャーナリストが投獄されたり、追放されたりしています。軍法により、文化展覧会は禁止されています。新聞も、数社が閉鎖させられました。パレスチナ旗を掲げた者は誰でも、投獄されます。伝統的なパレスチナ衣裳を着ると、罪人とみなされるのです。全出版物に対する軍事検閲も加わります。

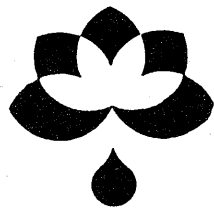
こうしたパレスチナ人抹殺のやり口以上に、アラブの市、町、村に対する「鉄拳政策」があるので、もし、子供がイスラエルの車に投石したら、その村全体を「処断」するわけです。罰には、だいたい、数軒の家屋破壊、男性の拘留が付きものです。軍占領当局は、パレスチナ人「容疑者」にはその場で発砲する権利をイスラエル軍兵士と武装ミリシアに与えています。

す。

パレスチナ人民との連帯活動に参加している友人の皆さん、「土地の日」を記念し、ICSSは、パレスチナ人民との連帯行動へむけた協力の強化を、進歩的運動を担っている人々に訴えたいと思います。それは、

- 一、パレスチナ解放のために、パレスチナ人民、とくに被占領地のパレスチナ人民との連帯行動強化
- 二、パレスチナ人民の唯一合法の代表としてのPLOが完全承認を勝ちとるよう、我々の活動を強化しよう
- 三、「PLO統一支持」、「PLOの反帝・反シオニスト闘争支持、これとの連帯」を、さらに呼びかけよう。

- 二、世界、地域、一国レベルで、パレスチナ連帯運動と他の進歩的運動とのつながりを強化しよう
- 三、あらゆるレベルで、PLOとの連帯活動を各国民が活性化できるようにしよう。
- 三、世界平和実現へむけた活動、とくに八六年の国連「平和のために活動する年」を機に、と、我々の連帯活動とを相互動員しあおう。



اللجنة الدولية حول صبرا وشاتيلا
صندوق بريد ١٢١٤٤ دمشق

ICSS
International Committee on Sabra and Shatila
P.O. Box 12144 Damascus

激動の中東

ドキュメント

一九八六年三月八日

四月一〇日

三月八日(土)

- ・レバノン
西ベイルートで、仏TVチーム四人誘拐される。
- ・パレスチナ
PLO執行委員会声明発表。
- ・シリア
三月革命、二三周年を期して、ア

サド大統領は、「イスラエルとの戦略的均衡達成に向けて大幅に進出した」

イスラエル

シリア三月革命記念日を期して、シリア国境に軍事警戒体制。

モロッコ

ハッサン王、PLOに、亡命政権確立を急ぐよう提起。

三月九日(日)

レバノン

①南レバノンの「セキュリティゾーン」で、レバノン民族抵抗戦線はイスラエルのパトリール隊を待ち伏せ攻撃。イスラエル兵一人死亡、五人負傷。

②バチカン外相、ベイルート着。

イスラエル

①ヘルート党(極右)大会開催にあたって、シャミル外相とその副官たちは、イスラエルによる西岸およびガザの併合を主張。病欠した党創設者、元首相ベギンは、書簡で、シャミル支援を要請。

②パレス首相、閣議で、米国のサウジアラビアへの武器輸出に反対を表明。

③エルサレムの高官、「シリアはゴランを局地戦場にしようとしている」とロンドン、サンデー・テレ

グラフ紙に語る。

・イラク

イラク外相タレク・アジスはムバラク・エジプト大統領をカイロに訪ねた。「軍備援助要請のためでなく、両国間の友好確認のイラク大統領のメッセージを伝えるため」

・GCC

リヤドで、ガルフ諸国は、「石油の価格が受け入れがたいレベルまで暴落。これを変えようのは、OPECの内外を問わず、産油国の共同以外にない」と語る。

三月一〇日(月)

・レバノン

①パチカン外相、シルベストリーはジェマイエルと会い、シリアのアサド大統領との対話再開の方法について協議。

②イスラム聖戦機構は、処刑した仏人の死体の写真を公表。なお、八日に誘拐された仏TVチームの四人の責任は否定。

③元大統領フランジェ、ダマスでアサド大統領と会見。

④国連事務総長補佐官、マラヒ・グールディングとの話し合いの中で、ベリ、ジュンブラット両大臣はそれぞれ、安保理決議四二五の実施を強調。

・パレスチナ

①PFLPは、PLO執行委が八日のコミュニケーションの中で、アンマン合意を明確に破棄していないことを批判。ファタハ反乱派も同様の非難を行った。

②DFLPのハワトメ議長は、「アラファトはソ連の支持を失った」と語った。

③ナブルスのキャンプで、イスラエル兵一人殺さる。

・イスラエル

①イスラエルは、シリアのアサド大統領の演説をもとに、シリアがゴラン高原を取り返すために限定戦争を開始する可能性がある、と、非難。

②イスラエル軍は、被占領地のエルサレムで、反イスラエル攻撃を計画しているという容疑で、二〇人のパレスチナ人を逮捕。

・エジプト

①アブデル・ハリム・アブーガザラ国防大臣は、治安は一〇〇%確実、と語る。

②ムバラク・マーフィー会談。ムバラクはさらなる米国からの援助を要請。

・ソ連

プラウダ、「米国は、『反テロ攻

撃』をカバリーに、国家テロ政策を公然と遂行している。世界中の人民は、米国の国家テロの停止こそ望んでいる」と主張。

三月一日(火)

・レバノン

①仏人質問題

仲介役のラザード氏、ダマスカスからベイルートへ。仏政府、ジハード(イスラム聖戦機構)の要求拒否。

②南部レジスタンス

イスラエル軍拠点に対し、ミサイル、サブ・マシンガン攻撃。この二四時間に六回の攻撃。

・シリア

①被占領ゴラン

シリア人(主にドルーズ)、「イスラエル当局とは交渉せず」と声明。

②パチカン外相、シリア訪問。

・イスラエル

①ベレス「シリアは好戦的。しかし、シリアは、イスラエルと平和的に交渉すべし」

②ヘルート党大会

党大会代議員追加権限をもつ信託委員会委員長選挙。シャロンがベギン二世を破る。

・西岸・ガザ

ナブルスで、イスラエル兵一名せん滅闘争が昨夜あり。

・エジプト

ムバラク「タバ問題解決後、ペレスと会う」

・米帝

①ワインバーガー

「イスラエル・シリア間の緊張が高まっている」

「ガルフの安定にむけ、サウジアラビアへの武器供与必要」

②レーガン

米議会に対し、三・五億ドル分の対サウジ武器売却を提案。

空対空ミサイル・サイドワインダー 一六六六基

地対空ミサイル・ステインガー 二〇〇基

空対海ミサイル・ハーブーン 二〇〇基

引き渡しは八九一九一の二年間で。

三月二日(水)

・レバノン

①南部レジスタンス

ピント・ジュバイルで、イスラエルパトロールに待ち伏せ攻撃。イスラエル兵数名をせん滅。イスラエル側は、戦車をくり出し、報復。UNIFILスポークスマンも、「イスラエルが、新しい侵略行為」

と警告。

②カラミ首相、ソ連代理大使と、仏人質問題、南部問題について、討議。

③ベイルート

東西境界線で停戦監督中の仏軍オブザーバー、一名が狙撃され、死亡。

・イスラエル

タバ交渉、再開。米外交官、「専門家」も同席。

三月三日(木)

・レバノン

①ジハードが、人質のVTRフィルム発表。

②「革命的正義戦線」が仏のTV取材班四名を拉致。

・米帝

上院海外活動歳出小委員会でのシユルツ回答

「テロリスト容疑者を拉致し、米国の法で裁くために、"それほど強くない武力"行使を支持する」

三月一四日(金)

・イスラエル

故パルメ首相葬儀に、ペレス出席予定。

日本からは福田。

・米帝

ペンタゴン、二四日から一週間、

リビア沖で定例の「海軍演習を行う」と発表。空母サラトガ、コラルシー、アメリカ参加の大規模な演習。

三月五日(土)

・レバノン

南部レジスタンス

イスラエル軍パトロール、SLAへの攻撃二回。イスラエル北部のセツルメントへロケット攻撃。

・シリア

①人質問題について、アサド大統領、ミッテランからの親書受け取る。

②国連政治問題顧問、シヤラ外相と会談。

・リビア

トリポリで第二回反帝・反シオニズム・反差別・反後進性・反ファシズム国際会議スタート。カダフィ大佐開会演説主旨は「全人民にとって、帝国主義は危険な存在」。

三月一六日(日)

・レバノン

①南部レジスタンス

「セキユリテイベルト」内への潜入、攻撃。イスラエルは、レッバヤ町に砲撃。

②ジュンブラット、三日間のアルジュリア訪問に出发。

③UNIFILスポークスマンのコ

メント

「南部で緊張を激化させているのは、イスラエルである。米もUNIFIL予算をカットして、イスラエルの側面援助。UNIFILには、イスラエルの攻撃抑止力がない。イスラエルは、レバノン南部攻撃軍事作戦を止めるべき」

・西ベイルート

①民族派八組織が共同して新しいセキユリテイ措置。各派均等に計五〇〇名の特別部隊を編成し、レバノン警察と協力しながら、ミリシア事務所閉鎖、非合法武装グループ武装解除を行う。

②カラミ首相

経済、財政危機克服にむけた法の秩序回復をアピール。

・イスラエル

①科学開発省スポークスマンが、米SDIとイスラエルの協力現状を発表。

②麻薬密輸で八人のユダヤ人逮捕。

③反イスラエル闘争

ハイファ市中心のバス停で爆弾。ハイファでは過去六カ月間に、これで六回めの爆弾闘争。

・エジプト

①先月のCSF(治安軍)暴動事件調査報告来週予定(当局発表)。

②訪問中の人民中国主席、ムバラクと会談。

三月一七日(月)

・シリア

イラクスパイによる車爆弾攻撃を発表。イラク非難。

・イスラエル

労働党

四月の党大会にむけ、代議員選挙開始。党大会の争点は、ヘルート党閣僚の共闘違反問題か?

三月一八日(火)

・レバノン

南部レジスタンス

西ベカを「パトロール」中のイスラエル部隊に、時限爆弾攻撃。

同部隊を車輛ごと、せん滅。これに対し、イスラエルは、ベイルート上空の威嚇飛行。加えて、南部ハスパイヤ区を重砲撃。武器狩り、レジスタンス狩りのための各戸ローラー作戦。サイダ市のサアド氏は「住民よ、警戒を怠らず、イスラエルの攻撃をはねのけよ」とアピール。

・米帝

米下院、対テロ新法案可決。主に、海外の米外交施設保安強化、米市民人質への保障。

三月一九日(水)

・レバノン
首相官邸前で、家族を誘拐されたレバノン、パレスチナの母親三人が、座りこみ。「母の日」の統一行動。

・イスラエル

①米軍事代表団、四日間の訪問開始。戦略合意のとり、有事用武器弾薬貯蔵、空挺軍事病院設置のイスラエル保管、合同訓練問題について協議するため。

②ペレス、バチカン・イニシアチブの環として、教皇が四月に、史上初のローマのシナゴグ訪問を行う予定について、コメント。「これを機に、バチカンと正式な関係を作りたいものだ」

・エジプト

①カイロ貿易見本市で、「エジプト革命組織」がイスラエル攻撃。一名せん滅し、数名負傷。同組織による対イスラエル攻撃は四年六月来、三回。エジプト内で処刑されたイスラエル人は過去一年九カ月間で九名。

②ヨルダンのフセイン王、カイロを一日訪問。

・米帝

シュルツ、訪欧旅行に出る。五日間で、トルコ、ギリシア、仏、イ

タリアを回る。

・NATO

明日からNATO国防相会談。春季米ソ軍縮交渉後、初めて。一方、西独国防相が、欧レベルのSDIを正式に同会議に提案していくものと予測されている。

三月二日(木)

・レバノン

南部レジスタンス「セキリティゾーン」内で、SLAと交戦。

・イスラエル

昨日の対イスラエル攻撃に関するペレスのコメント
「今回の事件で、エジプト・イスラエル関係を変更するようなことはない」

レーガンは、「エジプト人の反キヤンプ・デービッド風潮は、リビアの煽動による」と、リビアに責任転嫁。

・仏

パリで爆弾。

・米帝

ニカラグア反革命軍への一億ドル「援助」案、下院で否決(二二対二一〇)。

アラファト(アブ・ダビド)

「ダマスカスとの新しい関係開始

の用意あり」

三月二日(金)

・日帝

金丸幹事長、トルコ訪問開始。五日間の予定。

・仏

シラク新首相、就任初日にシュルツと会談。対テロキャンペーン協力で意気投合。

三月二日(土)

・米帝

八六年度、第一回の地下核実験をネバダで強行。下院議員六〇名以上が延期を要求していた。

三月三日(日)

・レバノン

カラミ首相、国連次官と会談。「三者合意のみが、レバノン救済、平和達成の道」と強調。

・イスラエル

①労働党中央委員会。「リクードとの連立より、総選挙を」という動議否決。ペレス路線承認。

②反イスラエル闘争

イスラエル予備役兵、刺殺され、M一六ライフル奪取。

・米帝

①ワインバーガー

「八一年来、一八回もリビア沖で演習してきた。うち七回も、リビ

アの「領海」なるものを「侵犯」したが」

②シュルツのトルコ訪問了。ギリシアへ。援助増額を求めるトルコと折り合いつけず。

・アラファト議長

中東和平行き詰まりは米国のせいと米非難。

三月二日(月)

本日より、米帝、リビアへの軍事攻撃。名目は、「公海での自由航行、演習の自由を守るため」

・米帝

①太平洋艦隊司令官「八五年一二月来、事故六回、事故死将兵五人、損失機数五機(一・三億ドル相当)」。パイロットは、よろしく注意すべし」と訓戒。

②シドラ湾侵犯し、リビアのミサイル基地爆撃、哨戒艇も爆撃す。

③レーガン「ニカラグア政府軍がホンジュラス領内侵犯してまで、ニカラグア反政府ゲリラ(米の傭兵)討伐戦。これに対抗するため、二〇〇〇万ドル相当の軍事供与」を決定(すでにニカラグアに備蓄してある米軍装備のうち、二〇〇〇万ドル分を引き渡すだけ)。

・イスラエル

ペレス、米支持声明(リビア攻撃)

・アラブ連盟

第八回アラブ連盟評議会が開会したところ。緊急に、リビア支持声明。

・リビア

①防空システムにより、敵機三機撃墜と発表。

②全土、臨戦体制、反米デモ。士気高し。国営ラジオでは、「これは、

リビア一国に対する攻撃を受けて立つ闘いはかりではない。アラブ民族総体、アラブ民族の未来を守りぬく闘いである」と鼓舞。

③国連総長あてに、米糾弾の文書を提出。

④カダフィ大佐、アサド大統領、ベン・ジャデイド大統領に電話し、事態の報告。

三月二日(火)

・リビア

外相、在トリポリのアラブ各国大使招請し、米帝の暴挙を報告。「この侵略行為は、アラブの航空機の安全飛行、アラブ船舶の安全航海を脅かしているも、我が国は断固として対決する。シドラ湾への侵略、許すまじ。米、NATO基地は、今後、リビアへの敵対目標とみなされる」

・リビア支持

①シリア
アサド大統領の親書携え、カッダム副大統領、リビア入り。

②アルジェリア
大統領、訪ソ出発。
外務省は、「力の誇示」として米非難。世界平和と安全のために、双方に自重要請。

③ソ連

「第六艦隊が地中海から撤退するなら、ソ連艦隊も同時撤退する」と声明。

④日本の左翼

米帝のリビア攻撃数時間後に、東京の米大使館、皇居へのロケット攻撃。

・米帝支持

①サッチャー

「シドラ湾はリビア領海と認めない。したがって、同湾は公海であり、公海航行、公海上の演習権は米国にある」

②ペレス

「米国は、公海上の自由防衛の権利を有する。リビアは、国際テロリズムの親玉であり、近隣諸国に暴力、脅威を輸出している元凶なり。テロルに対し、断固たる立場をとり、行動に移ることこそ、世界平和、自由防衛の土台なり」

・米帝批判

①米下院外交問題評議会議長

「議会に計ることなく、リビア攻撃をレーガン大統領が指揮した。これは、七三年の大統領権限法に反し、軍の権威をないがしろにするものである」

②英労働党

「海賊行為である。二〇世紀の今日、いかなる国に対してであれ、力でものを言わせることは、どのような理由があっても許されない」

三月二日(水)

・レバノン

①南部レジスタンス
イスラエル「領」に、ロケット砲攻撃。

②ペイルスト

比較的平穏。ただし、昨日は、ペイルスト郊外、レバノン山地域で小戦闘。

③東ペイルストで車爆弾。

米帝のリビア攻撃

①リビア支持

PFLP、DFLPが支持声明。DFLPは「リビアへの連帯表明として組織の全財産、軍事力量をリビアの望むように使ってほしい」と表明。
アラブ世界労組世界連合は、全イ

スラム諸国に対し対米全面ボイコットを呼びかける。

北イエメン大統領、リビアの勇敢な立場を賞讃。

クウェートのアル・アム紙「米の挑発を受けて立つリビアと我共にある」

UAEのイッテハド紙「アラブ諸国が沈黙を保つとは驚きだ。かつて、米とイスラエルがアラブを闇討ちした時のあの痛みは、何処なるか」

エジプトの国民進歩統一党党首、リビアとの連帯を表明。

米黒人運動リーダーのジェシー・ジャクソン師

「リビア挑発を前から米政府が狙っていたのは明々白々なり。レーガンは、リビアとニカラグア爆撃、粉砕の狂気にとりつかれている分、危険だ」

中国—国際関係の常識にもとる。

世界平和評議会は、米非難声明配布。

マルタ、国連安保理議長あて書簡

で、地中海中部の情勢緊迫について、の会議を要請。

伊のローマ、ミラノでは、計八〇

〇〇人の学生が反米デモ。

・米帝

①報道陣の乗った民間機を米軍機が追跡し、第六艦隊のいる「公海」上空から追放。約一五五分間。CBS、NBC、CNNカメラ班が、これをリビアから目撃。

②トルコ、パナマ、ハイチ、セネガル、ザイール、モロッコ六カ国との投資条約承認を、レーガンが米上院に要請。エジプト、カメルーン、パングラデシュ三カ国とも同様の条約締結近しとされている（「援助」から直接投資へ。形態は変わる資本の輸出）。

・米帝のニカラグア攻撃

（三月二二日から、ニカラグア政府軍がホンジュラス領内に反革命軍掃討戦に出たとキャンペーンを張ってきた）ホワイトハウスのスポークスマン

「対ニカラグア政府軍戦争のため、米軍ヘリパイロットがホンジュラス軍輸送協力」

三月二七日（木）

・レバノン

①南部レジスタンス
ファタハが、イスラエル「領」内セツルメントのキリヤト・シャモナに四発のロケット砲攻撃。八二年の侵略以来、セツルメントから初めて怪我人。

数時間後、イスラエル空軍が、サイダ市近郊のパレスチナキャンプ二カ所を爆撃。婦人や子供が多数殺された。

②対ジェマイエル戦

ビクフィエに砲弾の雨、おみまい。LFも応戦せり。

・ギリシア

シュルツ訪問抗議デモ。アテネで二万人。

三月二八日（金）

・レバノン

西ベイルート

シリア派の検問所で小競合い。キャンプ戦争、再燃か？

・米帝
米帝は、二二日に、在外米公館に

対し、リビアとの間に海軍レベルで対決のみこみがあるから、警戒体制をとるよう指令していた（ヘラルド・トリビューン）。

三月二九日（土）

△リビア対米帝▽

・リビアのカダフィ大佐

「次回米帝が攻撃してきたら、伊、仏内の米軍事施設に対して報復する。また、エジプトも、攻撃対象になるかもしれない」

・米帝

レーガン曰く「米国の力は、上手

にかつ正しく用いられれば、世界中の被抑圧人民にとって、不滅の希望の火たりえよう。エルサルバドル、グレナダ、フィリピン、ハイチなどでは、（米国が上手に力を用いた分）人々の望みが民主運動として開花するのは驚くほど早かった」

レバノン南部
UNIFIL軍のガーナ兵、フィジー兵が各一名、正体不明の攻撃を受け死亡。一二〇番めのUNIFIL軍戦死者となる。

・イタリア
ローマ教皇暗殺未遂事件裁判でブルガリア人三人に「証拠不十分のため、釈放」

三月三〇日（日）「土地の日」十周年
被占領地では、各地でデモ隊に対するイスラエルの弾圧。

・ナプルス
ナプルスでバラタキャンブ警察が催涙弾。

・ベツレヘム
ベツレヘムのデハイシキャンブ軍パトロールが威嚇射撃。

・ジェリコ

投石。二件の手榴弾攻撃。地雷で軍用車一台破壊。外出禁止令出る。

・レバノン

金曜からのキャンブ戦で、双方合わせて一〇名死亡、負傷二五名と

のこと。

・イスラエル

南アのアフリカ人リーダー二〇名、技術、組織化、指導訓練のため初めてイスラエル入り。

三月三一日（月）

・レバノン

①仏軍オブザーバー部隊、撤収。二年間の東西ベイルート停戦監視任務で七名が死亡。

②ロイター

ある筋によると、三年度の死者総計一九五名（二年度は一三五名とのこと）。

・米帝

①アフガン反政府軍へのステインガミサイル供与決定。

②対リビア戦

ニューズウィーク誌

「リビアは、世界中の三五カ所の米権益を攻撃目標にしている。アラファトは、数カ国の米大使館見取図をカダフィにみせた」

③シドラ湾での「演習」は、今後も継続すると、宣戦布告。

④マーフィー、シリア工作の重要性を強調。

・イスラエル

①ペレス、三日間の非公式米帝訪問に出席。

「新しい中東和平」攻勢の努力を強調。シリア対策は、ゴラン問題を前提にしない、と語る。今回は非公式なので、レーガンとは会談しないも、五月の訪米時には、行う見込み。

②ラビン

「対シリア戦は避け得る。ただし、シリア、レバノン、イスラエルとの直接交渉の意図はないのが現状。イスラエルの最重点課題は、エジプト関係強化。レバノンに関しては、国境からのカチューシャ（ロケット砲）攻撃はまだあるも、『セキュリティゾーン』が有効な防壁として機能している。また、やられたら、やり返す」

③対イスラエルゲリラ戦

ガザ等三カ所で、警察と衝突。ガザでは、投石に対し警官が発砲し、パレスチナ青年一名殺さる。ビールゼイト大でも、学生一名が殺さる。イスラエルは、同大を「軍管区」と宣し、ロックアウト。

④シヨランスキーの反ソキャンペーン

「帰国」後初めて公式の場に登場。「近く、自分は訪米するが、ソ連、これを好まず。ワシントン訪問か、ソ連内ユダヤ人同朋の弾圧か、い

づれかをとれと、ソ連が恫喝している。イスラエルは、声を一つにして闘うべき」と語る。

・エジプト
アル・アハラム紙によると、ムバラクは「米からの対リビア戦共同の誘いを三回断った」とのこと。

四月一日（火）

・レバノン

①南部レジスタンス

昨夜の朝方、マルジャユーン北部数カ所にロケット砲攻撃。また、「セキュリティゾーン」内でイスラエルのパトロール隊に爆破攻撃。

イスラエルは、報復に、数カ村を襲撃。

②キャンブ戦争解決努力

キャンブ治安維持のための調整委員会、ベリ、PNSF代表、シリア軍オブザーバーに、権限移管。

・イスラエル

①ペレス訪米の目的は、イ、対テロ対策、ロ、SDI、ハ、イスラエル経済問題とされ、「今後、中東地域の主要関心事は、経済問題になろう」とペレス語る。

②ペレス、ブッシュ、シュルツと個別会談。

シュルツとの会談で、「ヨルダン―パレスチナ代表団との直接交渉

実現にむけ、若干の前進があった」

「シドラ湾での米海軍演習は偉大な動きであり、リビアとカダフィは平和にとって、危険な存在となってきた」とペレス。

・ヨルダン

①アンマンのPLO事務所閉鎖。

②フセイン、ブルネイ着。ブルネイ、インドネシア訪問旅行、約一週間の始まり。

・スーダン

一八年間初の国会選挙投票日。

・アフガニスタン

パキスタンのAP電によると、政府軍が大攻勢の準備中。

・エジプト

米大使館スポークスマン発表。一億七六〇〇万ドルの供与をUS AID（米国際開発機関）から受ける合意（五種）に調印。

四月二日（水）

・レバノン

①南部レジスタンス

SLA拠点三カ所にロケット砲攻撃。イスラエルのパトロール隊への爆弾攻撃一回。イスラエル「領」内砲撃。

②カラミ首相、国会外交委員会委員長と、南部問題、UNIFIL駐留延長について討議。

・アラブ連盟

書記長、夏以前に、北イエメンにて、特別アラブサミット開催を宣言（第八回アラブ連盟評議会は、リビア問題で多忙となり、ガルフ戦討議ができなかった。これを不満とするクウェートから、特別ア

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

・アラブ連盟

書記長、夏以前に、北イエメンにて、特別アラブサミット開催を宣言（第八回アラブ連盟評議会は、リビア問題で多忙となり、ガルフ戦討議ができなかった。これを不満とするクウェートから、特別ア

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

UNIFIL仏部隊一四〇〇名縮小を発表（誘拐された仏市民一人）。

ラブサミット開催要請が二週間前から出されていたもの。

●ヨルダン

フセイン国王一行、インドネシア入り。インドネシア・ヨルダン貿易拡大合意調印。

●米のリビア攻撃

①英オプザバー紙がクウェートから伝えるには、米のリビア攻撃は、八四年度から配備開始の新型兵器ハームミサイルと、反対空ミサイル、電子システムの実習・テストの狙いもあった。

②イットバド(アブ・ダビ)・アル

・ファジル紙論調
「対テロキャンペーン、米の国益云々は、侵略合理化論理。ブッシュは、ガルフ諸国の安全防衛責任とか「域内平和」とか強弁しているが、米国と中東は、地理的にこれほど離れている。対リビア挑発攻撃の口実にすぎぬ」
「こうした口実、やり口をみると、米国はシリアを狙っているようだ。シドラ湾での攻撃は、シリア攻撃の前奏曲かもしれない。米国は、イスラエルへの脅威、五・一七合意破棄に力があったシリアを目的のこのとみなし、思い知らせんとしている」

③ソ連外務省中東局長、シリア訪問し、アサド大統領と会談。シリアの反米帝・反イスラエルの闘いと立場を相互確認。

④AAPSO(アフリカ・アジア人民連帯機構)会議(三月二十六日、四月二日)了。反帝・反イスラエルのアラブ人民の闘い支援・支持のコミニケ発表。

●米帝

①ワインバーガー、第一八回米韓安全問題審議会参加にむけ訪韓。在韓米帝軍を視察。

②SDI

西独政府代表団訪米。SDI協力に関する「了解覚書き」調印。私企業レベルのみの参加方式(西独社民党は、「八七年一月選挙勝利、政権奪回後、このSDI参加取り消し」を四月一日声明)。

四月三日(木)

●TWA爆弾闘争

ペレス「リビアは関係していない。アブ・ニダル、アブ・ムサが関心している」
・マーフィー、ドバイ入り。
・ガルフ戦
イラクは、イラン沿岸のタンカー二隻攻撃を声明。
・レバノン

①政府、UNIFIL駐留六カ月延長公式要請。

②南部「セキユリティゾーン」イスラエルは、周辺に地雷源設置を決定し、交通止め。

③アマル第六回大会。

四月四日(金)

●TWA爆弾闘争

伊政府、レバノン婦人を容疑者として姓名公表。

●イスラエル

ここ数週間、イスラエル産柑橘類がスペイン産より攻勢(EC市場)。

●米帝

①ブッシュ、原油暴落に対し価格維持対策のため、ガルフ歴訪に出発。サウジ入り。

②ワインバーガー

「必要なら、リビア沖での演習中止もある」

●レバノン

①二八日からのキャンプ戦争による死者三四名、負傷者一〇八名とのこと。

②カラミーフランジェ会談(約二年ぶり)。

③ジュンブラット訪伊第二日め。パチカン外相と会談。

④イスラエルによると、三年度の反イスラエルレジスタンスは八〇回

の攻撃をかけた。

四月五日(土)

●レバノン

TWA爆弾闘争で容疑者扱いされたレバノン婦人、記者会見。「関係ない」と容疑否定。

●米帝

ワインバーガー、訪日。

●アフガニスタン

反共軍、「政府軍の大攻勢に押され気味」と声明。

●反米闘争

西ベルリンの米兵行きつけナイトクラブで爆弾闘争。死者二名。負傷者一五〇名以上。

米帝は「あくまでも、反テロキャンペーンで闘う」と声明。西独内務省スポークスマンは「明らかに米兵を狙ううちしたもの」。

●SDI

伊も私企業の参加方式をとる立場固める。

四月六日(日)

●西ベルリン闘争

①仏政府、反米闘争予防措置として、駐パリリビア外交官二名を含むリビア人四名を国外退去処分。内務省スポークスマンによると「仏など欧州各地の米政府関連施設へのテロ攻撃を準備していた」。

②イスラエルで、大企業の対テロ国際会議。海外から一五〇人が参加(日本からは?)。

③西独国防相、史上初のイスラエル訪問。一〇日までの予定。

●韓国

全斗煥、就任後初の訪欧旅行。英、西独、仏、ベルギーへ。ベルギーでは、EC本部も訪問予定。

●加の中東外交展開

加外相、ヨルダン訪問。ヨルダンとの対話作りにむけ、PLOとの「公式の接触」ありと声明。

●米帝

①ワインバーガー、三日間の訪日を終え訪比。反米ストが米大包围。対比軍事援助増額を約束。

②CIA長官ケーシー、「CIAとモサドの共働実権はこの間進歩したので満足」と語る。

③ブッシュ、サウジ訪問中

「対ヨルダン兵器売却中止方針継続、ただし、サウジには五億ドル以上売却する予定」(「ガルフ」からの石油輸出を何者にも邪魔させぬ)「四月五日」とか。ちなみに、米帝はサウジからの石油輸入をふやしている。

●イスラエル

国会国防外交委員長エバン(労働党)、エジプト与党の招待うけて、近くカイロ訪問。

①ズホルタで、カラミーフランジェ会談二回目。

②ジュンブラット

イスラム原理主義潮流の勢力拡大と武装パレスチナ勢力のレバノン帰還に懸念表明。

③イクリム・ハアルウブで、スンニとPSP小競合い。

④サイダのパレスチナキャンプをイスラエルが爆撃。

⑤ラビン、シリアへの牽制

「シリアは、テルアビブ攻撃能力をもつミサイルを配備している。もし、シリアがイスラエルの都市攻撃に出たら、我らは百倍にしてやり返す」

⑥マーフィー、カイロからイスラエル入り。駐イスラエル米大使と会談。

●米帝

①ワインバーガー、バンコク入り。レセプション予定のホテルでワインバーガー到着数時間前に、爆弾爆発。

②ブッシュ、バーレーンへ。

「マーフィーの中東訪問は、新しい中東和平実現へむけた我々の努力の姿なり」と自讃。

●英帝

北アイルランドのゲリラ闘争。警察発表では、過去一週間で一五回も警官へのテロ。

四月八日(火)

●レバノン

①南部レジスタンス
対SLA決死闘争(車爆弾)一六歳のハイダル・カイス烈士。レバノン・パレスチナ党員。これでサナの決死闘争来、二〇回め。戦果、SLA兵四名せん滅、負傷一名。晩方にも、SLA攻撃。「セキユリティゾーン」内では、イスラエルのパトロール隊に、待ち伏せ攻撃かけ、攻勢。

②ジュニエのフランジ党事務所近くで車爆弾。九名死亡とのこと(一月一五日来、五回め)。

③レバノン赤十字社労働者二五〇〇名が二四時間スト終了。一九四五年創設来、初のスト権行使。

④カラミ、駐ペイルトソ連大使と会談。

●米帝

ABC TVによると、米諜報筋によると、ベルリンの反米爆弾闘争にリビアが関連していたという確証あり。

●イスラエル

①労働党大会、今日から開始。ペレスは、モダイ蔵相辞任要求堅持を強調。

②経済

八六年度第一半期(八五年四月一七月)の貿易赤字約五億ドル輸出の伸びの花形は繊維製品、ダイヤモンドによる。

③反イスラエルゲリラ闘争
エルサレムでイスラエルのバスに火炎びん攻撃。ラマッラで、イスラエル車に投石。

●トルコ

首相以下大型代表団、サウジ入り。

●キプロス

キプリアーノ、英訪問。サッチャーと会談。

四月九日(水)

●レバノン

①SSNPが四月九日を「抵抗の日」と制定。八五年のこの日、レバノンの乙女サナが決死闘争を行った。

- ② 仏人教員、誘拐さる（この二年間二〇人めの誘拐された外国人）。
- ③ 西ベイルートでシリア派のレバノン軍将校、暗殺さる。
- イスラエル
- モダイ蔵相、辞表提出。政府の経済政策を公に批判したため（主にセツルメント増設を主張）、戦術共闘合意違反。
- 西ベルリン闘争に関し、対テロキヤンペーン強まる。
- 西独
- 「ヒア」が関連していた証拠ありとして、リビア外交官二名を国外追放処分。
- 米のCBS
- リビアへの報復を米政府が検討中と報道。
- SDI
- オーストラリア、不参加を公式発表。
- モロッコ
- ハッサン国王、イスラエルとの直接交渉で、アラブ・イスラエル紛争解決を、再度呼びかける（公に直接交渉方式を主張するのは、モロッコのみ）。
- トルコ代表団、インド入り。
- EC
- 現議長国オランダ外相を、シリア

へ派遣。

・米帝

① レーガン

リビア制裁をサミットの題目に加える。

② ワインバーガー、オーストラリア入り。

③ ネバダで地下核実験

これに対し、ソ連は、「一方的核実験停止を行ってきたが、米は応えず。今回の実験に対抗し、我々も停止中止せざるを得ぬかもしれぬ」

・パキスタン

ベナジール・ブット、帰国。民主化闘争のシンボルとしての活躍、期待さる。一〇〇万人が出迎え。

四月一〇日（木）

・レバノン

① サイダで車爆弾。

② UNIFIL司令官職、フィンランド軍に。

③ ベリーPSNF間でキャンプ戦停戦合意成立。

・イスラエル

① 内閣危機

モダイ蔵相辞任問題をめぐり、リクード閣僚全員辞任（選挙でうつて出る）の動きあり。シャミルは、モダイと蔵相ポスト・外相ポスト

交換戦術主張。一三日の閣議で、結論予定。今日ペレス・シャミル会談。

② 反イスラエル闘争

ナジャハ大で、マスリ暗殺四〇日「追悼祭」。数千人の学生が構内占拠。パレスチナ旗、ひるがえる。

・西ベルリン闘争・反テロキヤンペーン

① 西独が、「リビアがパレスチナテロリストにやらせた。東ベルリンのリビア大使館・トリポリ無線傍受により、確証つかんだ」と発表。これに対し、リビア側は「憶測にすぎぬ」と反論。

② 西独政府、駐トリポリ西独大使を本国召還。次回米国がリビア攻撃に出たら、伊、西独の米権益を報復攻撃するというカダフィ大佐の発言について協議するため。

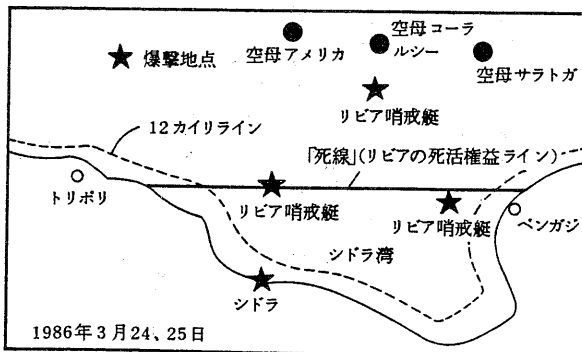
・PLO再統一の動き

アルジェリア政府がPLO諸組織の会議場所提供提案したのに対し、PLOが歓迎。

・反帝闘争

ポルトガルでエール・フランス事務所に爆弾。アクシオン・ディレクトが「米・仏共働への攻撃」と声明。

・米帝



1986年3月24、25日

中東レポートNo.9 2月号正誤表

- P 4 第4段 右から8行め 共同歩調は→共同歩調について
- P14 第4段 アーセム→アッセム
- P19 第1段 右から3行め 親アミン派の→ファランジ党機関紙
- P22 第4段 最後行 キンチ→キムヒ
- P22 第1段 右から3行め PND→PNM
- P24 第3段 右から15行め カダフィ→カダフィ大佐
- おわび ジュマイエルとガマイエルについて両方の発音があります。

マフディー、カイロからアンマン入り。